

GLOBAL DIALOGUE

3.3

5 issues a year in 15 languages

グローバル・ダイアログ:国際社会学会ニュースレター
第3巻 第3号 (2013年5月号)

Sociology as a Vocation

職業としての社会学

Raewyn Connell,
Randolf David

Revolution and Counter- Revolution

革命と反革命

Nazanin Shahrokni,
Parastoo Dokouhaki,
Simin Fadaee,
Abbas Varij Kazemi,
Mona Abaza

Universities in Crisis

危機にある大学

Satendra Kumar,
Klaus Dörre,
Stephan Lessenmich,
Ingo Singe

- > 誘拐されうる者——メキシコ都市部における暴力の標準化について
- > メキシコの若者における社会的分断
- > 現代日本における社会的不平等
- > 単純さの美学:日本文化における俳句の位置
- > 理事会議 スペイン・ビルバオにて
- > 紹介:ポーランド編集委員・公共社会学研究室
- > カナダ社会学会
- > 編集者への手紙

NEWSLETTER

International
Sociological
Association



VOLUME 3 / ISSUE 3 / MAY 2013
www.isa-sociology.org/global-dialogue/

GD



Universities in Crisis 危機にある大学

私は、本号において記されているRaewyn Connell女史の「職業としての社会学」について触れたい。彼女は今、シドニー大学のピケットラインに立っている。彼女は同大学にて教鞭を執っている／執っていないスタッフによるストライキに参加しており、終身在職権の衰退や無関心、そしてアカデミックな場における自由への脅迫に対する抗議を行っているが、この動きはほとんどの大学、エリート層／非エリート層、そして世界へと影響するものとなっている。

大学の目指すものが公益から私益へととなり、大学はその所産を顧客(学生、州、企業、その他大学が誘引することのできるもの)に売らなっている。顧客をめぐる競争は激しいので、大学は自らをブランド化することによって、全国ランキングおよび国際ランキングの上位を目指そうとしている。教員らはおそらくこのようなランキングに憤慨するだろうが、しばしば彼ら自身がそのランキング作成に関わっており、それも熱意をもって取り組んでいる。このことはつまり、英語でかかれた学術雑誌だけではなく、世界的に知名度のある学術雑誌、例えば米英での学術雑誌でそれぞれ独自の問題意識や論点、メソドロジーを設定しているものに投稿することを指している。〈南〉側からの社会学者——必ずしも南側とは限らないが——は、彼らの国々が直面している喫緊の問題からしばしば引き離されてしまうこともある。

そのようなシステムに抵抗しようという資源、勇気、そして関心さえも、持つものは少ない。だからこそ我々は、本号でイェーナのフリードリヒ・シラー大学に所属する3名の社会学者が紹介しているような、ドイツ社会学会が全国ランキングへの参加を拒否したことを称えるべきである。同時に我々は、多くの大学がランキングにさえ立ち現れないこと、そして「触れられていない」大学という大きな区分があることを忘れてはならない。Satendra Kumar はそのことが何を意味するのか、Uttar Pradesh(インド)という地域を取り上げ説明している。この地域では、ある大学が州の助成金によってまかなわれた虚偽の学位を与えるカレッジに対し認定を与える権利を売ることによって利益を得ているとのことである。このようにして公的資金は、政治装置の一環として、そのカレッジを経営する政治家の私利となっている。このことは世界のヒエラルキーにおいてシドニー大学と逆の位置を成しているが、圧力は同様のものである。もちろん、そこには大学に対する因習的な圧力が存在している。Nazanin Shahrokni とParastoo Dokouhakiは、イランにおいて女子学生の入学者数が増加していることに対するバックラッシュが大きくなりつつあることを報告している。2009年のイラン革命に参加した抵抗者たちの多くは(Abbas Varij Kazemi とSimin Fadaeeの投稿を参照)、このような大学に反対する部類の出身であった。当然のことながら、イラン政府は国内の大学に対して細心の注意を払っている。

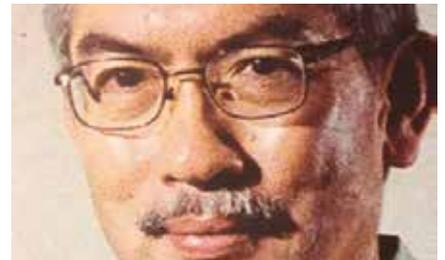
多くの事例において、大学と社会とを隔てている薄い膜が消えつつあることが示されている。我々は社会の外にいるかのように振る舞うことはできない。そのため我々は、合理主義者と市場主義者の側につくか、それともそのような人々を批判し公に異議を唱える側に身を置くべきか、という立場の選択に迫られている。職業としての社会学について投稿したRandy Davidは、政治的な荒廃著しいフィリピンにおいてさえ、批判的でありつつ同時に公的な立場にあることが可能であることを示している。それでもなお、エジプトのMona Abaza やメキシコのAna Villarrealが述べているように、暴力が日常化している恐怖の世界においては、そのような立場へと決然と踏み込んでいく勇気が必要である。民衆は我々の主張に耳を傾けないかもしれないが、それは沈黙すべき理由とはならないのである。(芝真里訳)

> グローバル・ダイアログは15言語に翻訳されており、ISAのウェブサイトにてご覧いただけます。

> 投稿についてはburawoy@berkeley.eduまでお知らせください。



Raewyn Connellは、オーストラリアのフェミニストであり、Southern Theoryの著者である。彼女は、キャンパスへ市場が参入することによってさらに歪んでしまったグローバル分業過程のヒエラルキーに社会学者が加担していることを憂慮している。



Randolf Davidは、フィリピンの著名な社会学者である。彼は社会学での知見を公共の場へと生かすよう、批判者として身を置く様子を述べており、このことが政治的な関与とは全く異なることを示している。



Nazanin ShahrokniとParastoo Dokouhakiは、イランの大学における女子学生の増加が、政府が労働市場における男性の利権を守ることによるジェンダー分離のストラテジーをいかに増長させているかについて、論考している。

> Editorial Board

編集委員会

編集長: Michael Burawoy.

編集主任: Lola Busuttil, August Bagà.

本部編集委員:

Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa,
Jennifer Platt, Robert Van Krieken.

編集顧問:

Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoğlu,
Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jiménez,
Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi,
Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato,
Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Chin-Chun Yi,
Elena Zdravomyslova.

地域編集委員

アラブ諸国:

Sari Hanafi, Mounir Saidani.

ブラジル:

Gustavo Taniguti, Juliana Tonche,
Célia da Graça Arribas, Andreza Galli,
Renata Barreto Preturlan, Rossana Marinho,
Angelo Martins Júnior, Lucas Amaral.

コロンビア:

María José Álvarez Rivadulla,
Sebastián Villamizar Santamaría, Katherine Gaitán.

インド:

Ishwar Modi, Rajiv Gupta, Rashmi Jain, Uday Singh.

イラン:

Reyhaneh Javadi, Shahrads Shahvand, Saghar Bozorgi,
Najmeh Taheri.

日本:

西原和久(日本語版翻訳監修)、芝真里(日本語版編集
事務局幹事)、姫野宏輔、高見具広、岩館豊、池田和弘、
福田雄、三部倫子、佐藤崇子、小川翔平、井出知之、堀
田裕子、小坂有資、小杉亮子、土田久美子

ポーランド:

Mikołaj Mierzejewski, Karolina Mikołajewska,
Krzysztof Gubański, Zofia Włodarczyk, Adam Muel-
ler, Patrycja Pendrakowska, Emilia Hudzińska, Justyna
Witkowska, Konrad Siemaszko, Julia Legat.

ルーマニア:

Cosima Rughiniș, Ileana-Cinziana Surdu, Lucian Rotariu,
Angelica Helena Marinescu, Adriana Bondor, Alina Stan,
Andreea Acasandre, Catalina Gulie, Monica Alexandru,
Mara Șerban, Ioana Cărtărescu, Telegdy Balazs,
Marian Mihai Bogdan, Cristian Constantin Vereș,
Ramona Cantaragiu, Elena Tudor, Monica Nădrag.

ロシア:

Elena Zdravomyslova, Anna Kadnikova,
Elena Nikiforova, Asja Voronkova, Ekaterina Moskaleva,
Julia Martinavichene.

台湾:

Jing-Mao Ho.

Turkey:

Aytül Kasapoğlu, Nilay Çabuk Kaya, Günnur Ertong,
Yonca Odabaş, Zeynep Baykal, Gizem Güner.

ウクライナ:

Svitlana Khutka, Olga Kuzovkina, Polina Baitsym,
Mariya Domashchenko, Iryna Klietsova, Daria Koroctkyh,
Mariya Kuts, Lidia Kuzemska, Anastasiya Lipinska,
Yulia Pryimak, Myroslava Romanchuk, Iryna Shostak,
Ksenia Shvets, Liudmyla Smoliiar, Oryna Stetsenko,
Polina Stohnushko, Mariya Vorotilina.

メディア・コンサルタント: Annie Lin, José Reguera.

> In This Issue 目次

Editorial: Universities in Crisis

危機にある大学

2

The Vocation of Sociology – Collective Work on a World Scale

社会学の使命——世界規模における集合的営為

by Raewyn Connell, Australia

4

The Vocation of Sociology – Critical Engagement in the Public Realm

社会学という職業——公共領域で批判的に取り組むということ——

by Randolph S. David, Philippines

6

> REVOLUTION AND COUNTER-REVOLUTION 革命と反革命

Backlash: Gender Segregation in Iranian Universities

バックラッシュ——イランの大学における性別分離

by Nazanin Shahrokni, USA and Parastoo Dokouhaki, Iran

8

Who is behind Iran's Green Movement?

イランの「緑の運動」の背後にいるのは何者か?

by Simin Fadaee, Germany

11

Appropriating the Past: The Green Movement in Iran

過去の活用: イランにおける緑の運動

by Abbas Varij Kazemi, USA

13

The Violence of Egypt's Counter-Revolution

エジプトの反革命における暴力

by Mona Abaza, Egypt

16

> UNIVERSITIES IN CRISIS 危機にある大学

How Indian Universities Become Profit Machines

インドの大学はいかにして収益マシンになったか

by Satendra Kumar, India

19

German Sociologists Boycott Academic Ranking

ドイツ社会学者によるアカデミック・ランキングのボイコット

by Klaus Dörre, Stephan Lessenich, and Ingo Singe, Germany

21

> FOCUS ON MEXICO メキシコより

Kidnappable: On the Normalization of Violence in Urban Mexico

誘拐される者——メキシコ都市部における暴力の標準化について

by Ana Villarreal, Mexico

23

Social Fragmentation among Mexican Youth

メキシコの若者における社会的分断

by Gonzalo A. Saraví, Mexico

25

> INTRODUCING JAPAN 日本の紹介

Social Inequality in Contemporary Japan

現代日本における社会的不平等

by Sawako Shirahase, Japan

27

Haiku: Beauty in Simplicity

単純さの美学: 日本文化における俳句の位置

by Koichi Hasegawa, Japan

28

> FROM AROUND THE ISA ISA関係より

Executive Committee Meeting in Bilbao

理事会議 スペイン・ビルバオにて

by Michael Burawoy, USA

30

Introducing the Polish Editors

紹介: ポーランド編集委員・公共社会学研究室

by Karolina Mikołajewska, Poland

33

Canadian Sociology is ready to welcome you!

カナダ社会学はあなたをお待ちしております

by Patrizia Albanese, Canada

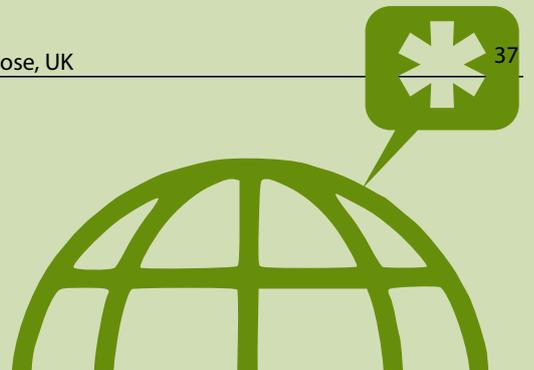
35

Letters to the Editor

編集者への二つの手紙

by David Lehman, UK and Hilary Rose, UK

37



> The Vocation of Sociology

Collective Work on a World Scale

社会学の使命——世界規模における集合的営為

by Raewyn Connell, University of Sydney, Australia
レイウィン・コンネル (オーストラリア、シドニー大学)



レイウィン・コンネル近影

オーストラリアの社会学者であるレイウィン・コンネルは、階級権力、および学校における階級とジェンダーとの関係についての研究で、その名が知られている。その著書『ジェンダーと権力』(1987)におけるジェンダー関係の制度的な基盤に関する理論が高い評価を受けた。また、覇権的な男性性の概念を発展させた『マスキュリティ』(1995)によって、グローバルな研究者として名声を得るにいたった。社会学の歴史に対して、そしてその歴史がグローバル・ノースに由来することに対してつねに関心をよせ、主流の社会学に対する、痛烈に批判的かつ論争的な論文「なぜ古典的な理論は古典なのか？」をものし、その後『南の理論』(2007)へと至った。この本は、グローバル・サウスの理論家にとって最も重要なものとなっている。もし彼女の仕事のなかで、一貫した主題というものがあるとすれば、それは次のようなものである。知識というものはそれが産み出される文脈／状況の外部から理解することはできず、その文脈／状況に彼女は生涯をかけて闘ってきたということである。より詳しくは<http://www.raewynconnell.net>を参照してほしい。

社 会学者であるということは、一人の労働者であり、それを職分とすることであり、労働力の一部でもあるということです。このことを理解することによって、偉大であることや重々しいといった誤った理解から自由になれます。社会学者の職分とは、知識を産み出し、伝え、適用させることにあります。これは集合的なプロジェクトであり、けっして個人的なものではありません。社会科学は、自然科学と同様に、共有された知識に仕えるのであり、本来的に公共的なものです。明らかになったことを伝達すること、それがまさしく公にすることであり「パブリケーションpublication」の謂いである。社会的世界について知るといふ社会的なプロセスに対して貢献すること、それが社会学者になることなのです。

> 社会学を求めて

私が学生だった1960年代のオーストラリアでは、社会学はきちんと教えられていませんでした。私は、歴史学で修士号をとった後、政治学で博士学位を取得しました。そのことはとても良い知的な訓練になりましたが、しかし世界は燃え立つような状況にありました。私は、ベトナム戦争に反対する学生運動に加わり、大学の保守主義に挑戦していきました。私たちは、より適正で現実に関わる知識を求め、自分たちの手でアマチュアの自由大学を立ち上げました。

博士課程の後、私は枠組みを求めて、米国のある有名な社会学部へと向かいました。そこでは、ラディカルな学生と右派の学科とがほとんど内戦状態となっていて、やがて大学は学生のストライキによって封鎖されました。私は、レヴィ＝ストロース、サルトル、ミルズ、ゲールドナー、ラザースフェルドといった人びとの、重要な仕事を読むことができました。のちに、これらの人物がすべて男性であり、白人であり、グローバルノースの人々であることに私は気づき、読書の範囲を広げていきました。

オーストラリアに戻った後、私は二度にわたって、新設の大学で新しく社会学のプログラムをつくりあげるグループに関わりました。私たちは全体のカリキュラムをつくることができましたが、それはとても幸運な歴史的瞬間でした。今日では、大学で仕事をする人びとに対してひじょうに重たいコントロールがのしかかっています。しかしカリキュラムをつくりあげる時にはつねに、創造性のための空間があるのです。

> 制度

オーストラリアでは今日、すべての学部教育のおよそ半分が、非常勤の労働者によって担われています。高い学位をもつ多くの若い人びとが、2、3の大学キャンパスで複数の科目をパートタ

>>

イムで教えながら、どうにか生計を立てているのです。これで使命／職業といえるのでしょうか。発展途上国においては、終身在職権をもっている学者でさえ、しばしば複数の職をもっています。

こうした状態では、さまざまな学術雑誌や会議、研究プロジェクト、学会といった社会学の制度的な仕組みのなかで、活動的になるのは容易ではありません。しかし、こうした事態であるにも拘わらず、新自由主義的な経営者は個人々の成果を測ろうとする考えに取りつかれたままです。企業の世界において個人々の「パフォーマンス」が指標となったように、権威のランキング、授業料収入、雑誌の数、助成金といったものが、近代の大学の趨勢となってきました。こうした事象が分別を欠いたものであるということは、40年前にクラウス・オッフエが書いた名著『産業と不平等』ではっきりと示されています。巨大な組織の複合では、ある成果というものが、どの程度まで特定の個人やある特定のカテゴリーの労働者によるものかを合理的に決定するのは不可能である、と。これは、まさしく有用な社会学の実例ですが、私たちの雇主はそのことを忘れ去っています。

代わりに、大学においでますます優勢なものとなっている企業世界では、個人々のキャリアというものが偽りの使命として構築されています。企業の経営幹部は、メディアからのインタビューのなかで、企業やその株主に対するヘッドハンティングの代理人からのお召しがあるまでは決して止むことのない情熱を明言しています。この人たちが実際にしているのは、富を築くことです。大学のなかで、富を築く人はほとんどいません。その代わりに、知識を築き上げるといふ、価値のある、具体的で集成的なプロジェクトを共有することができるのです。

> 社会学的知識

こうした集成的なプロジェクト—その制度的な仕組みと「知識の体系」—の現在の状態は、しかしながら、深刻な問題をはらんでいます。社会学の思想は、19世紀の帝国主義と20世紀の経験主義とが堆積し、労働者と女性の運動にもとづく主題によって刺激が加えられ、機能主義から脱構築論にいたる知的崇拝によって傷つけられています。学術的領域における社会学理論はおどろくほどヨーロッパ中心主義です。社会学的な調査は、しばしば機械的で単なる繰り返りとなり、コンピューター化が、現実の問題と深く関わることを、機械的な手続きの力へと置き換えています。また、発展途上国での社会学的な調査は、タンディカ・ムカンダウィレが述べているように、貧しい人びとのための貧しい調査、すなわち資金が乏しく、短期間であり、十分に理論化されないものとなっています。

それゆえ、社会学のプロジェクトは社会学批判を必要とし、その批判は新しい様式をとっています。もっとも重要なことは、グローバル・ノースによる社会学的知識の支配を解き、南で生成された理論と脱植民地社会をプロジェクトの中心に据えることだと思います。こうした批判には抵抗もあり、その理由も理解できます。北のパースペクティブというものは、ディシプリンとして制度化されており、何千人もの社会学者はそのなかでキャリアを積み、それを機能させるために多くのエネルギーを費やしているからです。

社会学的な研究は難しいものです。少なくとも、十分に成し遂げるのはたいへん困難です。私は自分の学生にこうアドバイスしています。斜交性のoblique回転から直交性のorthogonal回転を語る必要が生じるまでは、棚にある教科書からは離れなさいと（初心者には、まず斜交を忘れなさいとアドバイスします）。あらゆる研究上の問題はつねに新しいものです。そこでは、新たな 이슈が問題となっていますし、異なる資料が手元にあり、データ

にあらわれた独自のパターンこそが重要なのです。方法を学ぶ最良の方策は、それを実践することです。次に良いのが、ほんとうに優れた研究報告を読むことであり、研究者が自身の問題をどう解決したのかを考えることです。すべての人は自身にとっての上位10書をもっています。私にとっては、バリー・トーンの『ジェンダー・プレイ』、ロバート・モーレル『男の子から紳士へ』、ゴードン・チャイルド『ヨーロッパ文明の開闢』といった仕事です。すべての優れた研究は、とてつもなく多くの労力がかけられています。膨大な情報に対して、時間をかけ、緊密に関わることによって、社会学的想像力が働き始めるのです。

> 聴衆、公衆

数日前のことですが、私は、55Uppittyという、高齢期のレズビアンたちへの自伝的インタビューのためのウェブサイト立ち上げに行きました。(http://55upitty.com/)。シドニーにおける多くのレズビアン・コミュニティがこの喜ばしい行事に集まり、世代交代やエイジングを目に見えるようにすることについてたくさん話がなされました。そこは、自らを想像するコミュニティではなく、一つの知的プロジェクトとして再形成しようとするものだったと私は思いました。

社会学者たちは、多くの場合、自分たちの仕事や、研究対象となったコミュニティや諸制度にとって役に立つことを望みます。私自身も、強固でリフレクシブな論理をとれないながら、いくつかのプロジェクトに関わってきました。オーストラリアのゲイ・コミュニティで用いられたセクシャリティとエイズ予防に関する調査もそのうちのひとつです(Kippax et al., Sustaining Safe Sex)。また、教師と学校政策担当者を対象とした、教育における社会的不平等に関する研究も行いました(Connell et al., Making the Difference; Schools & Social Justice)。

大学に身を置く社会学者は、社会学的知識を用いることができる他の集団とのつながりを持つ必要があります。それゆえ、私は労働運動とのつながりを長らく重視してきたし、それは階級に関する私たちの研究にとって有益なものでした。私のアカデミック・キャリアの締めくくりは、社会学部ではなく、教育とソーシャル・ワークの学科でした。しかし、社会学にとって潜在的な聴衆はより広範に存在しています。社会学はマスメディアへと入り、国際的なネットワーク、出版、翻訳、旅行そして流言といった、いくつもの不可思議な経路をたどって流通していきます。ブラジルやエストニアや中国の人びとから、私の仕事について知ったので連絡を取りたいという話を聞いた時には、なんてすばらしいのだろうと思いました。この時、地球規模での相互に深く混交していくプロジェクトが社会学には可能なのだという感触が得られました。

> そして、根本的な目的とは

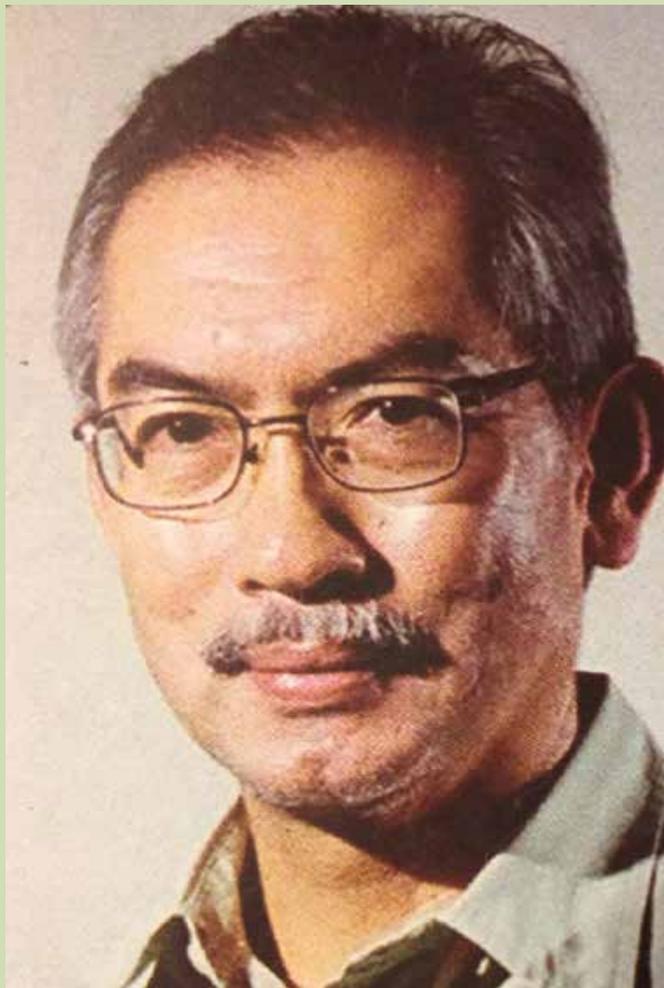
私は、社会学という使命を引き受けました。なぜなら、社会科学は、暴力や不正義や破壊といった、私たちに共通の問題に取り組むための知識を生成すると考えたからです。そして、いまもそう考えています。社会科学は、社会の自己認識の中心部分にあり、ある重要な民主的役割を果たしうるので。知識を産み出すことや、知識を機能させることがどんなに難しいことかを私は学んできましたし、同僚やさまざまな制度にどれだけ依存しているかも学んできました。上の述べたような課題を考える際には、サミール・アミンの言葉でいえば「世界的な規模で」考える必要があることも学んできました。このことは、時にくじけそうになるような見通しにありますが、それは同時に鼓舞するものでもあります。もし社会学が一つの使命であるならば、それは、かつてそう意味していたような、個人の宗教的な義務感ではありません。それは、集会的な職分であり、世界へと広がっていなければならないのです。(岩館豊訳) ■

> The Vocation of Sociology

Critical Engagement in the Public Realm

社会学という職業
——公共領域で批判的に取り組むということ——

by Randolph S. David, University of the Philippines, Quezon City, Philippines
ランドルフ・S・デビット(フィリピン・ケソンシティ、フィリピン大学)



ランドルフ・S・デヴィット

Randolf Davidは、有名な公共社会学者である。Nation, Self, and Citizenship: An Invitation to Philippine Sociologyという受賞歴のある本の執筆者であり、有名な学者でもあるRandolf Davidは、学外では、1995年から執筆しているThe Philippine Daily Inquirerの彼の日曜コラム“Public Lives”や、社会問題を扱う彼のテレビ番組“Public Forum”で非常によく知られている。彼は、社会学を学ぶ多くの学生に影響を与え、新聞やテレビ番組に社会学的な視点を導入している。

私にとっては、社会学は一番好きな学問ではなかった。知的であるという理由以外の理由で、私は社会学に興味を持った。父親のような法律家になるため、1960年代初頭にフィリピン大学に入学した。法律家は、社会問題を分析するのではなく、社会問題を解決することができる。当時は、教育を受けるというよりも、ひとつの職業を学ぶために大学に入学した。

もし法律を学ぼうと考えたなら、政治学や哲学、あるいは社会科学の何れかを学ぶ必要があった。法科大学院に進学する前段での必要条件是さほど厳しくなく、どのような学士号を取得した人びとにも法科大学院へ進学の道が開かれていた。このように、取得学位によって制限されず法科大学院に進学できるため、社会学のような新たな学問は恩恵を受けることがあった。

私はもともと英語を主要な言語としていた。法学の夜学に通う一方で、卒業後はジャーナリストとして生きていこうとも考えていた。しかし、若い時には、完璧な計画がどこかで脱線することもあり得るだろう。大学3年生の時、私は選択科目のひとつとして社会学の入門科目を受講した。なぜなら、この授業の教授は良い成績を出すと聞いており、難しい文学の科目で成績が普通評価であったため、平均評価値を上げるためであった。

だが驚いたことに、私は社会学が好きになってしまった。私は、社会学の入門科目をとり終えた後も長い間、社会学の本を読み続けた。父は非常に驚いたが、私は最終学年で社会学に専攻を変えた。それは、私の人生を決定的に形づくったいくつかの偶発の出来事のうちのひとつであった。私は、社会学の授業で未来の妻と出会い、そして社会問題に接することで政治に対する私の見解は完全に変更させられた。法学を学んでいたなら、私は政治に関して型にはまった経歴を歩むことになったであろう。なぜなら私は大学政治に積極的に関わっていたからだ。もし社会学に進んでいなければ、私はフィリピンの現在の上級議員の多くと同じ法律クラスの中にいたであろう。

社会学を学ぶことで、私は、フィリピンのような問題を抱えている未成熟な社会を継続的に研究するために必要な構えを身につけることができた。ハンナ・アーレントの言葉を借りれば、私は「驚異の情念(the pathos of wonder)」——すべての問題に対して早急に解決しようとする衝動に抵抗するような訓練された観察する習慣——に占有されている自分自身を見つけた。長期間の組織的な順応は、革新的な政治と結びつきやすい。そして、60年代後半になり、社会学者はマルクス主義者であることが当然のようになった。

しかし、大学の社会学者のマルクス主義と、党員のマルクス主義とは同じものではなかった。後者が革命を実践することを必然的に強いており、組織のために批判的に反省することを中断することが望まれる一方で、マルクス主義者の社会学者はレーニン主義者の組織の問題点を語ろうとしがちだ。なぜなら、マルクス主義者の社会学者は反省の習慣を諦めないからだ。マルクス主義者の社会学者は、参加者として従事するというよりも、常時観察者であるだろう。イデオロギーから離れ、マルクス主義の社会学者の活動自体が、たゆみなく脱構築の方法で注視する対象となっている。

なぜなら実践は社会学者の長所ではないからだ、と私は考えている。社会学者には実践的なアドバイスを求めない。社会学者の主要な責任は、セカンド・オーダーの観察——日常生活で他の人びとが分節する方法を観察すること——である。社会学者が社会の複雑さに直面した際にとる態度は、社会問題の見かけ上の解決不可能性を覆っている焦り、絶望、そして恐怖よりもむしろ、物事がそのようであるということへの畏敬の念を表す一様態である。

社会学者の立ち位置として避けえないこのような態度の性質を考えると、解決を目的とするよりも物事の観察に集中しようとする訓練のために、発展途上社会のあらゆる場所があるのではないかと自問するのは、当然のことである。実際、私は、何回も自問自答している。

しかし、もし私が社会学者でなかったならば、社会において、早期解決よりもむしろ、世界が問題化されているまさにその枠組みを問うという知的な態度のための場所をつくるのが非常に大切だと考えることはないだろう。政治の使命は、学者の気質とは違っ

た気質を必要としている。もし自己分析をする習慣があるならば、あなたは有力な政治家や社会的活動家にはなれないだろう。私の考えでは、反省性は、政治家にとって最悪の敵である。

私は、反省性を有することで世界政治に引き込まれることに抵抗しているということをも十分認識していたと考えていた。しかし、私は間違っていた。2009年のある時、私はいくつかの兆候を解釈することで、国民から嫌われている大統領であったグロリア・マカパガル＝アロヨが任期の最後に政治的な報復から彼女自身を守るために議席を求めていたのではないかと、という結論に至った。我々は同じ地方議会に所属していたので、私が候補者になることで彼女を止めることができるのではないかと考え始めた。愚かな考えを捨てる代わりに、私は自惚れてしまい、間違いを犯してしまった。

私が出発する以前に、私にはフィリピン政治の巨人を止めるダビデの役割を与えられていたという事は理解していた。それは、フィリピンにおける救世主を探し求めているという壮大な話の筋である。しかし、私は社会学者としての職務を超えた時にリスクを背負う必要があるということに気づいていた。私は、自分の選挙区の具体的な問題を何も知らず、初めて選挙に立候補した。だが私は、それ以前に選挙事務所も持っていなかったし、選挙のための資金も持ち合わせていなかった。

特に私は、伝統的な政治に対して必要とされるような気質も持ち合わせていなかった。私は権力に対抗して立候補したが、権力を追求したいわけではなかったと気づいた。だが後戻りができないとわかっており、一生を費やして説明してきた世界に入る準備を始めたのだ。だがそれは、私が生きてきた限られた時間内では適切に理解することができないような生き方であった。私が立候補を届け出た日、私は、家族との時間をつくるには及ばないが、ひとりの人間の思いつきは満足させる必要があると考えることにした。だが私の決断が進展しないために、友人も含めた、大きな闘いを待っていた人びとから非難を受けた。

知識を持ち、公共領域で活動する社会学者として、あなたは権力に抗して立ち上がらなければならない自分自身を発見するかもしれない。もし社会学者であり続けたいならば、政治家あるいは政治団体のメンバーとして振る舞うのではなく、一般の人びとの一部として振る舞うようにしなければならない。社会学者としてのあなたの任務は、政治について問うことであり、政治の中での勝利を求めることではない。(小坂有資) ■

> Backlash

Gender Segregation in Iranian Universities

バックラッシュ——イランの大学における性別分離

by Nazanin Shahrokni, University of California, Berkeley, USA, and Parastoo Dokouhaki, journalist, Tehran, Iran

ナザニン・シャフロクニ(米国、カリフォルニア大学バークレー校)、
パラストウー・ドコウハキ(イラン・テヘラン、ジャーナリスト)

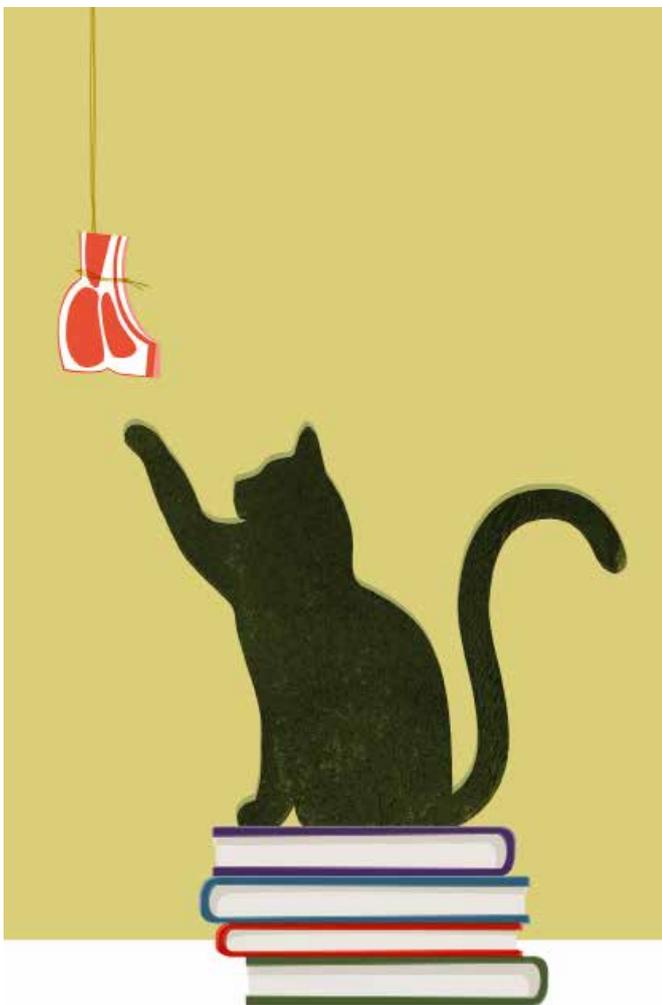


Illustration by Arbu.

新 学期の近づく2012年8月6日、イランにある準国営のメヘル通信社が、36の大学が77の研究分野から女性を締め出しているという報告を発表した。報道された女性の入学制限は、国際的な激論を巻き起こした。イランの人権派弁護士で、イギリスに亡命しノーベル賞を受賞したシーリーン・エバーディーは、国連事務総長バン・ギムンと国連の人権高等弁務官ナビ・ピレーに対し「イスラム共和制における近年の政策の一部は、公的な場における女性の強い存在感に我慢ならないがために、女性を家庭内の私的領域に引き戻そうとしている」という内容の手紙を書き、その措置を非難した。国務省の女性報道官ビクトリア・ヌーランドは8月21日に言明を読みあげ、「女性の権利を守るために、そして自国の法律と国際的な義務を擁護するために、イラン当局は、教育へのアクセスを含む、すべての生活の場における不当差別禁止を保証すること」を要請した。

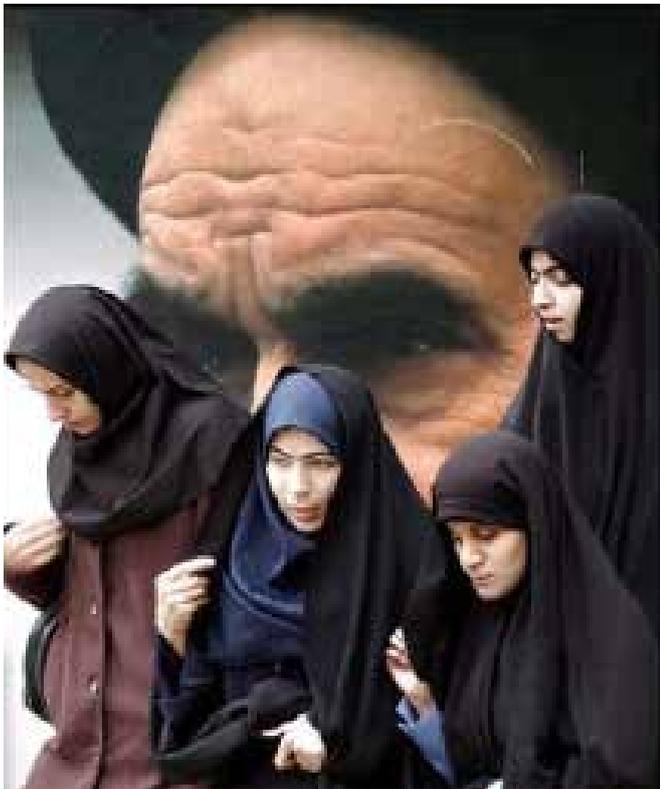
イランでは、高等教育の当局者たちはずっと防御的であり、ジェンダー差別の存在を否定している。入学制限の顔として広く知られている、閣内大臣カームラン・ダーネシュジュは、BBCとボイス・オブ・アメリカのペルシャ語版によって事実が歪められて伝えられてきた、と主張した。彼はこう言った。「かれら女性が不幸であるというならば、それは、私たち男性が正しいことを行っている、ということの意味なのだ」。

イランですでに始まっている学校の様子を見ると、イスラム共和国からの情報も西洋からの情報も、やや誤解を招くものであったことは明らかである。新たな入学制限は、男性にも女性にも影響を及ぼすものであり、長年続いている性別分離図式の一部である。そうした図式は、イスラム共和制の初期にまで遡り、異なる目標の事業のなかで異なる機関によって実行に移されてきた。1980年代には、家庭の外部で両性が混交することは「イスラム的ではなく」、公序良俗にとって危険なことであるという考えのもと、国家はキャンパス内で男性と女性とを物理的に分離しようとしていた。今日では、強硬派がキャンパスを新たに「イスラム化」しようとしており、イランにおける高等教育の女性化という意図せざる帰結を再調整しようとしている。新たな性別分離の措置は何よりもまず、教育、結婚、求人市場における男性のライフチャンスを守ることで、そして高い失業率と全般的な景気停滞の真只中で、政治的困難から国家を保護することを目指している。

> 細部に宿る悪魔

性別分離の体制全体は、異なる実践の寄せ集めであり、均一で

>>



イランの最高指導者の影にいる女性たち, Ayatollah Khomeini

はないものの、国中の大学で適用されてきた。

多くの大学は、実際にはイスラム共和制の最初の十年連続していた厳密なジェンダー割り当て数を単純に拡大させてきており、それによって、それぞれの学問分野のなかで男性と女性とに定員数が割り当てられてきた。たとえば、テヘラン大学は、イランの高等教育のなかでも最高レベルの機関であると一般的に考えられているが、ほとんどすべての学科において、教室の半分の座席を男性に、もう半分を女性に割り当てている。半分ずつの割り当てシステムには例外もある。たとえば、同じく首都にあるシェヒド・ベヘシティ大学は、110人の法律を学ぶ学生を受け入れているが、女性が60人、男性が50人である。

また、他の大学は男子学生と女性学生とを二つの群に分け、少なくとも理論上は、かれらは学問において二つの異なる道筋を歩むことになる。男性は秋学期に通学し、女性は春学期に通学する。だが実際には、こうした分離を監視する者がいないなか、学期を通じて、その二つの群は結局混交し、ついには男性と女性はいっしょに同じ選択科目で席を並べることになる。たとえば、イラン中央部にあるアラーク大学や、西部山間地にあるロレスタン大学ではそのようなケースが見られる。こうした方針を実行してきたのは、おもに地方の大学である。より議論の余地がある新たな試みを試験的に採用する場として、イスラム共和制はしばしば地方を利用してきた。

いまだに他の大学はもっぱら男性のために特定の学問分野を空けているが、それは通常、経済的あるいは文化的な理由づけによって、伝統的に「男性的」だと考えられている分野である。男性だけのカリキュラムでは選択範囲は非常に幅広いが、特定の学問分野——しばしば「女性的」と言われる分野——をもっぱら女性のために空けてきた機関もある。2012年にシャヒッド・チャムラン大学は、男性が歴史、ペルシャ文学、心理学、教育を学ぶことを認めなかった。

だが、新たなタイプの単一のジェンダーに限った入学許可には全国的に共通するパターンがあるようには思われぬ。むしろ、さまざまな大学が恣意的に措置を採用し、「男性的」学問分野と「女性的」学問分野との間にでたらめに境界を引いてきたように思われる。

しかしながら、性別分離は入学に関する事務官による許可の実行だけに限ったことではない。1980年代初頭、駆け出しのイスラム共和制内部の過激派は、教室を性別により分離するよう要請し、実際に男性の列と女性の列との間に仕切りが設けられるケースもあった。1979年のイラン革命の指導者アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニーは、伝えられるところによると、こうした行為に反対したと言われている。仕切りは取り払われたが、性別分離は続いた。廊下、教室、図書館、カフェテリアには看板が掲げられ、「ムスリマ」(sisters)と「ムスリム」(brothers)は離れた通路を歩き、離れた場所に座るよう指示されていた。こうした制限は結局は消え去っていった。というのも、それを実行するのは難しいことであり、学生のすべての動きを監視するにはコストがかかるからであった。科学大臣であるダーネシュジューはこうした措置を復活させたいと考えている。「今学期を開始するにあたり、男子学生と女子学生は離れた列に座ること。そして、大学の学部長はこのプロセスを監視する責任を負うこと」²。

また、ダーネシュジューは単一ジェンダーの大学に関して、聖職者の間で、そしてイランの議会マジュレス(Majles)において、再び支持を集めている。目標は国家のそれぞれの地方に女性だけの大学を設立することである、と大臣は述べている³。こうした女性だけの空間に国家が女性を指し向けようとしているのかどうか、あるいは国家はたんに高等教育のなかでより多くの選択機会を女性に与えようとしているのかどうかはまだ分からない。だが、公的領域へのアクセスおよびそこでの存在感を拡大する方法として、これまで女性はそのような空間を利用してきたということを過去の経験は物語っている。

> 綿と火、肉と猫

反対意見に直面し、ダーネシュジューは、性別分離の方針が「最高指導者の要望に合っている」⁴と主張した。実際のところ、最高指導者アーヤトッラー・ハーメネイは、1980年代初頭に教室での境界に反対したにもかかわらず、モハンマド・ハータミの改革政府の間、1990年代後半から、性別分離の概念を擁護してきたかのように見える。ある講演で、時の科学大臣モハンマド・モインのことを非難してきた指導者は、モインの無頓着さについてこう述べた。「男女共学は小旅行や保養所に行くようなことか。私にはまったく理解できない!世界中には両性が混交している場所がたくさんあるが、それはまったく普通のことだ。だが私たちの国、イスラムの環境には、このことは当てはまらない」⁵。テヘランのハージェ・ナスィール・トゥーサー大学のハーメネイの後継者Hojjat-ol-Islam Nabiallah Fazlaliは、キャンパスにおける「不適切な友人関係」に関する自身の「苦い思い出」について語った際、2009年における最高指導者の考えに深い理解の意を添えた。「女性と男性は綿と火のようなものだ」。Fazlaliはこう続けた。「その二つを引き離さなければ、綿は火に燃え移る」。男子と女子とを互いに引きつけるのは「本能と肉欲」である——それ以外の何ものでもない。「猫に生肉を与えたら、猫は肉を食べるだろう。そうさせないなんてことができるだろうか」⁶。両メタファーのなかで、若い男性は、若い女性を文字通りむさぼるために構えている。それでも、聖職者たちの関心対象は男性であるということが明らかである。2012年の初め、若者向けの宗教的テレビ番組のなかで、シェヒド・ベヘシティ大学のハーメネイの文化的後継者Hojjay-ol-Islam Naser Naghavianは、若い男子学生の過度な欲求不満の話を出し語った。その学生は、教室で女性の後ろの席に座った際に

>>

性的な衝動を感じるということが宗教的に許されることなのかどうかと彼に質問したのだそうだ。Naghavianに共感して、モタハリ議員はこう断言した。「男性と女性とが混交することになれば、性的関係もまた許されるべきだ。だがそれは西洋世界の話である。そうした関係が許されない世界では、性的欲望の抑圧は、さまざまな精神的かつ心理学的問題を引き起こすのだ」。後継者の考えによると、両性が自由に混交すれば、若い男性は欲望を抑圧しなければならないということである。この話の寓意は、猫が肉を食べることができないなら、肉は取り去られなければならないということであるように思われる。

>「現代女性の陰に隠れて姿が見えない」

セクシュアリティの規制は、性別分離の動きの背景にある唯一のモチーフではない。また、イランの大学における女性の立場に対する不安は、アフマディネジャド政権下に始まったものではない。1998年、イランの歴史上初めて、新たに入学を許可された大学生のランキングにおいて女性の数が男性の数を上回った。大学において女性の占める場は、それ以来ずっと増加し続けている。女性化の全般的な傾向は、学部生に対しては制限されていないということである。文化革命に関する最高会議の分科会である、女性の文化社会評議会のフェレシュテ・ルー・ハフザーによると、博士課程に在籍する女性の数は過去十年の間に269パーセント増加し、それと同時に、修士課程に在籍する女性の数は26倍にも跳ね上がったという⁸。

当局者および国家主導の通信社は、イスラム共和制が女性の権利を促進しているということを世界に発信するために、他の分野のものも含め(とりわけ農村地域における)女性文学の激増などを示しながら、その数値を示している。しかしながら、権力の通り道の内部では、統計は不安材料である。イラン議会の教育研究委員会のメンバーであるTayebeh Safaeiは、教育における女性の顕著な利得について危惧を抱いている。曰く、「こうした不均衡は社会的危機をもたらす⁹」。「社会的危機」とは何だろうか。保守的な報道機関やオンラインサービス、そしてコメンテーターらはすべて、男性が教育や労働力において不利を被ることに不安を感じている(実際には、男性は求人市場において女性の数を凌いで多くの賃金を稼ぎ続けているが、受け取り方が違うようである)。男性の栄光を鎮魂歌のように詠む、次のような記事もある。著者は綴る、「現代の男性」は「現代の女性の陰に隠れて」姿が見えなくなっている。そして次のように続ける。「男性は子どもと同等な存在になりつつあることは明らかだ。現代の男性を描くのものもともふさわしい表現、それは『尻に敷かれている』という言葉だ。女々しさが現代の中心である。つまり、男性はもはやかつての男性ではない。女性が太陽のごとく中心にあり、男性は周縁に追いやられ、役立たずで服従的だ。男性はあたかも月のようである[そして、その光は、太陽の反射光なのである]¹⁰」。

>男性と国家を守る

2012年9月15日、若者向けの国家主導の雑誌『Hamshahri Javan』の記事は、全章が女性の成功という話題に割かれているのだが、女性を危険なものとして描いている。表紙のタイトルは次のとおりだ。「手を挙げる!女性が社会的領域に侵略してくるぞ。まず大学に、そしてスポーツに、そして今や要職にまで。次なる標的は?」

アサルトライフルを持ったおさげの女の子が、ひよる長い脚の、背が高くシルクハットを被った男性を脅しつける。その男性の影は壁に映って見えている。このイラストは、1990年の日本のテレビアニメシリーズ「私のあしながおじさん」(原著は1912年、ジーン・ウェブスターが書いたアメリカ小説『あしながおじさん』

)を思い起こさせるが、ペルシャ語に吹き替えられ1990年代に国営テレビで放送された。このシリーズは、ジュディ・アボットというある女の子についての話で、彼女が影でしか見たことのない裕福な男性のお陰で大学に通うという内容である。『Hamshahri Javan』の表紙が語るメッセージを見ると、イランのジュディ・アボットは、男性後援者を必要とする女の子よりも大きくなっただけでなく、いまや男性にとっての敵になってしまったということを示しているように思われよう。

イランの高等教育における女性化は、イスラム共和制内外での政治的分離よりむしろ社会変動に深く根づいている。新たな性別分離体制への反対意見は、学生や教員たちからだけでなく、保守的な女性団体からもわき起こっている。その批判は非常に激しく、シャヒッド・チャムラン大学のように、若い男性と若い女性が学ぶ学問と場所に関する当初の制限を廃止した大学もある。

その一方で、イラン報道機関からの報告と政府官僚の言明からは、性別分離政策に向けた新たな動きとして、そのコストがおもに女性によって払われているにもかかわらず、男性性の危機がますます増大していることへの関心に関わる動きの方が多いことが分かる。男子学部生は性的な欲求不満を抱えつつ、暗い未来に直面しているのだという。国家は、有能な女性性に別れを告げたいのではなく、むしろ不能な男性性に回復策を与えようとしている。それは男性の感情面についてだけではない。イランは経済危機にあり、制裁によって圧迫され、通貨リアル下落に混乱し、高い失業率によって弱体化している。イラン国家を支配している強硬派は、無職の男性たちによってもたらされる社会不安を避けようと、あらゆる可能な措置をとっている。だが、かれらが権力を掌握することこそ、こうした男性たちをもっとも不安に陥れるのではあるのだが。(堀田裕子訳) ■

¹ Khabar Online, August 12, 2012.

² Fararu, July 7, 2011.

³ Fars News Agency, July 5, 2011.

⁴ Student News Agency (Iran), October 24, 2011.

⁵ Radio Farda, November 20, 2009.

⁶ Parsine, July 6, 2011.

⁷ Khabar Online, October 1, 2011.

⁸ Fars News Agency, February 10, 2012.

⁹ Tebyan, July 10, 2012.

¹⁰ Rasekhoneh, April 30, 2012.

> Who is behind Iran's Green Movement?

イランの「緑の運動」の背後にいるのは何者か？

by Simin Fadaee, Humboldt University, Germany
Simin Fadaee(ドイツ、フンボルト大学)



イラン革命の様相を追ったドキュメンタリー映画「The Green Wave」のポスター。

マ

ハムド・アフマディネジャド氏が当選した2009年のイラン大統領選挙後、アフマディネジャド氏の対抗馬を支持する人々が、選挙結果に抗議するデモ行進をおこなったことで、イランにおける「緑の運動」が始まった。その後、この運動への参加者は、現実の空間とバーチャル空間の双方で活発な複合的大衆運動に変化していった。ここで私は、中東における他の近年の社会運動家の運動に関する議論を考慮したうえで、イランの「緑の運動」にのめりこんでいる人々の社会的背景を調べてみることにし

たい。私は、「緑の運動」の主役となっているものは、「ポスト・イスラム化集団」(post-Islamized Milieu)と呼ぶべき、新しく出現した社会的な勢力であると考え。この社会的な勢力こそが、2009年のイランにおける「緑の運動」の核心であった。似たような社会的な力は、後の「アラブの春」においても核心となっている。

イランの「緑の運動」は、1990年代に始まった「改革運動(Reform Movement)」と呼ばれる、イラン全土での社会運動と関連づけて理解する必要がある。つまり「緑の運動」は、1979年のイラン革命によ

>>

ってイスラム教が導入されたことと、それに続いて起こった1980年代後半からの経済改革に対する反応として出現したものだということである。「緑の運動」は、改革運動の後継者として、改革運動のフレームワークを引き継ぐ形で現れた。

イラン革命の直後から、イスラム教はイランの社会構造のあらゆる面を支配するようになった。これは、既存の諸制度がイスラム法との関連から再構成され、経済・政治・社会のあらゆる面をコントロールするために「新しい」イスラム制度が導入されたということの意味している。1988年にイラン-イラク戦争が終結し、アヤトラ・ホメイニ師が死去したことによって、それまでのイスラム統制主義に対する反動として、市場経済が推進された。改革運動が出現したのも、多様性のある公共空間を求めるこのような文脈においてのことであった。

ピエール・ブルデューは、彼が「ハビトゥス」と呼んだ内在化された性向の総体にもとづいて、人間は異なるもの(つまり新しいもの)に対する反応を起こしていくということを論じた。同じような資源にアクセスし、同じような生活を送り、似たようなハビトゥスを持つ人々は、同一の社会集団を形成する。筆者は、イスラム教と市場経済の交差によって変化しつつある社会構造に基づいて、1990年代初頭のイランに出現した5つの主要な「社会集団」の出現を分析した。ここでは、これらの主要な社会集団のうち、「緑の運動」の隠れた推進力であった「ポスト・イスラム化集団」に焦点を当ててみたい。

「ポスト・イスラム化集団」は、高等教育とインターネットにアクセスする機会を持つ中流階級の都市居住者——たとえば研究者、アーティスト、ジャーナリスト、学生など——から構成されている。彼らは、イスラム共和国に代表されるような「古い」慣習や思想を拒絶し、「新しい」社

会についての思想を受容する。他の社会集団と比較すると、彼らは国際的な文化的な資本——たとえば外国語会話の能力、インターネット接続、海外旅行など——を、世界有数のレベルで保有している。この社会集団の一部のメンバーは、かつてイスラム化政策が進められる過程でその支持者であったが、国家の根底として用いることができる拘束力としてのイスラム教は拒絶する。この社会集団を結びつけているものは、多元論、市民権、リベラルな民主主義などの問題に対する自覚と共通認識であり、こうした共通認識が、新たな改革への要求を刺激することとなった。

1997年のイラン大統領選挙において、ムハマト・ハタミと彼による改革への支援は、改革運動に大きな勝利をもたらした。しかしその後、2005年の大統領選挙においては、保守的な中流階級や労働者階級、地方住民の社会集団に部分に対し、経済と人民主義問題について集中的にアピールをしたアフマディネジャド氏が当選した。その後、アフマディネジャド氏を支持したこれらの社会集団は、イランにおける慢性的な失業と、経済成長の鈍化に失望することになった。さらに2009年には、イランの経済状況はさらに悪化することになったのである。それどころか、ハタミ政権時代の改革運動が民主主義にもたらした業績は、すべて反動を受けることになった。

変化の兆しは、2009年のイラン大統領選挙の数週間前から起こり始めた。物議をかもしたアフマディネジャド氏の再選によって刺激を受けた、改革派の候補者であったムサーヴィー氏の支持者たちがあふれ出し始めたのである。選挙結果に対する反対運動は、より広範な政治問題を含むように拡大し、「緑の運動」へと発展していった。

「ポスト・イスラム化集団」は、初期の

段階で、改革運動の中核的存在を形成していた。しかし、緑の運動のさらなる発展と高まりは、他の社会集団(保守的な中流階級や労働者階級など)が運動に参加したことによって、可能になったものである。経済停滞と公民権の剥奪に直面しているこれらの社会集団を支えることのできる制度が不足していたために、緑の運動は、その運動自体の性格を、政治体制に対する抗議行動へとしだいに変えていった。その結果、緑の運動は、古い政治・社会・経済構造を劇的に変化させる潜在力を持った多層的で多様な社会運動となっていくたのである。(姫野宏輔訳) ■

¹ Fadaee, S. (2011) "Global Expansion of Capitalism, Inequalities and Social Movements: The Iranian Case," in Boike Rehbein (ed.) *Globalization and Inequality in Emerging Societies*. Basingstoke: Palgrave-Macmillan.

> Appropriating the Past

The Green Movement in Iran 過去の活用:イランにおける緑の運動

by Abbas Varij Kazemi, New York University, USA
Abbas Varij Kazemi(米国、ニューヨーク大学)



Photo : shaigan

FARS NEWS AGENCY

2009年、イランは、その当時も今も“緑の運動”として知られる独自の社会運動を経験した。この運動は、環境に対する抗議ではなく、争われた大統領選挙の結果、表現と改革のための若々しい欲望、そして国家政治的楽観主義の集会的なうねりによって促された。国内外にいるイラン人たちは、法的小および政治的改革を求めて街頭でデモを行った。ある人は緑の運動を宗教的な動きと特徴づけた。その運動は宗教的な図像や語彙を取り入れているが、これらの要素は、デモ参加者たちが新たに定義付けたコンテキストや政治的な環境の中でそれらを用いた場合、従来の宗教的な意味から自由になった。このシ

ンボルと儀式を再定義するプロセスは、ミシェル・ド・セルトーの戦術の概念を例証する。それは、次のようなことである。もし国家が抗議のための空間を与えることを拒否したならば、人々は彼らにとって入手可能なものを手にするだろう。つまり、イランの場合、宗教的な領域を意味したのである。

国家の戦略は、人々の戦術にはかなわなかったのであった。国家による制裁や組織化した宗教性の儀式が溢れる国では、時間と空間を巧みに扱うことができた多くのアリーナがある。それゆえ、緑の運動の宗教性、すなわち“緑のイスラム”は、新しい社会運動に関する単に一つの

緑の運動[イラン革命]は「緑の金曜日の祈り[グリーン・フライデー・プレーヤー]」を創出し、それをイスラム政府の中核のひとつとしつつも、神聖視されている原理である男女の分離を侵犯していた。

対話的な要素である。緑の運動はかなりの程度、社会的に下位のグループ、テヘランの中産階級の運動であった。そしてそれらの集団は、その都度はなやかな方法で自らを主張している。このようにイランの社会的転換は、宗教や権威を交渉において、イランの中産階級によって用いられている抗議方法のタイプと分ち難く結びついているのである。

>>



文化が再認識される戦略の一部として、緑の運動[イラン革命]は「緑」色がもつ歴史的意味を活用し、「再政治化」した。

尊心を与えたのである。

2009年の大統領選挙前の数ヶ月は、テヘランの街、車や人々は緑で覆われていた。つまり、緑は至るところで見ることができたのである。インターネットのオンライン上でさえ、イランのプロガーたちは、自分のサイトを緑で覆い尽くすことによって、運動の支持を表明した。その偏在する存在感は、都市、市民や政治的な変革の可能性に新たな息吹をもたらした。緑の布のリストバンドは、かつて、末期的な病者が慈悲や奇跡を探し求めるお守りとして考えられていたが、今はテヘランの中産階級の若者たちによって着用されるユニフォームの一部分として必要不可欠のものである。この選択は、もはや身体的な治癒を表すものではないが、さらに重要な病へ言及している。つまり、イランの政治的かつ社会的な健康を修復することである。この重大な転機において、集合的な装飾と緑の表明は新しい抗議の空間となったのである。

> 古いスローガンの反転

緑の運動の戦略は、1979年革命の間、テヘランの通りにおいて政治的スローガンとして利用された。そのスローガンとは、国家に対する果敢な挑戦を表現するものであった。1979年の革命後、新政府、イラン・イスラム共和国は、公式のイデオロギーの一部として抗議者のスローガンとレトリックを採用した。時間が経つにつれて、多くのイラン人たちは、国家としての革命的なレトリックを忘れてしまったし、もはや運動の本来の息吹も表されない。しかし2009年、抵抗者は、たんに1979年へ戻るのではなく、現在の政権の影響力や議題を自由に討論するために、そのスローガンを掘り起こした。希望の緑の腕章を身に付けている若い中産階級のイラン人たちは、街の通りを行進しながら埋め尽くし、再目的化された1979年のスローガンを叫んだのであった。このようなスローガンや感情は、エルストン・ブロッホが描いたアイデアを表現したのであった。すなわち、それは、「未来における潜在的な可能性」を得るために過去(1979年革命)の実現されていない

>>>

> 「沈黙のデモ」

2009年6月15日、「沈黙のデモ」はテヘランのメインストリートを覆い尽くした。沈黙が訪れるわずか3ヶ月前、選挙の文化は活力と希望によって街の生活を満たしていた。2009年6月の選挙以前は、日常生活は楽観的な政治の精神によって勇気づけられていた。人々は警察の介入や車のヘッドライトによる光線を恐れることなく路上に集まることに慣れていた。そして、人々の手は希望を持って挙げられていた。しかし選挙後、6月15日「沈黙のデモ」は、イランの緑の運動を運命づける重要な分岐点と考えられた。そのデモの参加者たちは沈黙しながら行進を続けて、アザディ広場に数十万が集結した。抗議の手は選挙前の熱狂ではなく、抗議するために挙げられたのである。この無言の抵抗は、争われた大統領選挙後に、政府が公の集会やそれを組織することを禁止することを決定したことによる人々の怒りによって燃え立たされたのである。かつてシャーを失脚させるために1979年イラン革命を主導した人々とは異なり、緑の運動の参加者たちは、政府や国家の保護に関する革命を残して、普通の生活を取り戻すために家へ戻らなかった。イランの中産階級の若者たちは、自分の仕事に従事したままで、かつ彼らの要求と闘い続けるための方法を模索した。政府は、緑の運動の活動を締め切り続けているが、参加者たちは抗議し続けるために革新的なアプローチを追求している。

イランの厳格で偏狭な政治的構造において、どのようにして社会運動は可能であろうか。私は、セルトーの戦術や戦略が可能性を秘めていると考えている。彼

の枠組みにおいては、高度に複雑な権力構造や一般的に普及した国家の存在感のある社会における抵抗は、可視化されない、戦術的に隠された実践を通して可能となるものである。セルトーに従って、私は、いかに緑の運動が特定の場所や象徴の目的や役割を再定義するのかを示したい。

> 緑色の再政治化

私たちは、運動の名前とそのシンボルカラー、すなわち緑が持つ意味から話を始めることができる。大統領選後の政治的な不安定な数ヶ月の間、緑色は抗議や異議を象徴した。そしてそれは、色自体が深い文化的で宗教的なルーツをもつイランの歴史的文脈の中において理解されなければならない。一方で、緑色は宗教的な意味をもつ。シーア派ムスリム教徒の間では、それは預言者ムハンマドと彼の家族への神聖な表明として理解されている。かつて、緑の神聖な性質もまた、支配的な宗教(スンニ派)に対してシーア派イスラム教徒の抵抗を意味するものとして抗議を表した。その歴史全体において、シーア派の文化は、地下抵抗ネットワークの形成を含む与党からの脅威に対して抵抗する中で発展した。何世紀にもわたって、シーア派ムスリムは、緑色を利用することによって彼らの抵抗を表明した。例えば、殉教者の喪を儀礼化することが挙げられる。シーア派が支配的になった16世紀以降では、緑色はイランの文化的な構造の神聖な一部となっている。それゆえ、緑色は2009年6月以前のイランにおいても政治的な重要性があった。そしてそのとき、都市の中産階級の指導者が宗教的な抵抗のシンボルに用い直し、政権に対する政治的な抗議として自

大望を描いたものであった。したがって、緑の運動は、大衆的な1979年革命のスローガン、「独立、自由、そしてイスラム共和国」を再度用いたものであった。そして、国営メディアはそれを決まり文句へと変えて、国家に対して唱えたのであった。

抗議者たちのスローガンは、抗議者たちにとってのイスラム共和国を映し出しているように思われるが、まったく新しい意味を伝えるために元々の意味を失っている。つまり、1979年革命は未完のプロジェクトであるということだ。ひとたび忘れ去られた政治は、“Allah o Akbar”や“Ya Hussein, Mir Hussein”のようなスローガンとともに戻ってくるのである。前者の1979年スローガンは、8年間のイラン・イラク戦争時において、軍事的なスローガンとして用いられた。そのときイランの兵士たちは、敵を攻撃するときに“Allah o Akbar”や“God is great”を叫んだのであった。そのスローガンは、2009年の選挙後に再政治化された。“Ya Hussein, Mir Hossein”は、亡くなったシーア派の宗教的指導者Imam Husseinを意味している。そしてその人は、Mir Hosseinを助けるように依頼されていたのである。Hossein Mousaviによれば、野党のリーダーや緑の運動の英雄であった。このように、国家が支援する宗教のスローガンは野党の政治的なシュプレヒコールとなった。

> 記憶の政治学

緑の運動による空間と場所の異なった使い方は、シーア派の文化の中で始まった。このような文化は、かつての少数派宗教の宗派としての役割にその起源を持っている。Ashura Day (680 A.D.)のカルバラで、宗教指導者Imam Husseinの政府の崩壊後、シーア派イスラム教徒は、“Every day and place is Ashura and Karbala”というスローガンを採用した。シーア派イスラム教徒は、このスローガンを内面化し、それはシーア派の文化の象徴となった。その遺産は、語り継がれたり追悼の行為の中で生き延びたりしている。最初の出来事はシーア派イスラム教徒の勝利ではなかったけれども、語り継ぐ行為は、イランの現代の儀式に取り込まれながら、その影響を今に見ることができる。初期のシーア派イスラム教徒のように、緑の運動の担い手たちは、抗議者や抵抗の場所を確保するために、Student Day、Palestine Day、あるいはその他の国家的で宗教的なイベントのような祝日を利用した。この現象は、Green Friday

Prayers or Green Mountain Excursionとして非公式の祝日へと繋がった。そしてそれは、政府に対して反対の声を挙げ続けるための機会となっている。

> 小さなメディアと政治

あなた自身がメディアである」とは、力強い緑の運動のスローガンであった。それは、政府に対するメッセージであり、メディアは誰もが異議を伝え、表現することができる強力な武器であるを実証した。野党の指導者Mir Hossein Mousaviは、「ひとたび政府がドアを閉じたらならば、我々は別の窓を探さなければならない」と宣言した。ひとたび新聞が廃刊になれば、別の新聞が法的枠組みの下で創り出されなければならない。すべてのブログがシャットダウンされ、数十もの別のものが開かれなければならない。¹

多くの独立した新聞やウェブサイトがシャットダウンされたように、電子メールやテキストメッセージは、街に出るタイミングを人々に知らせるときに非常に重要な手段であった。Facebookのようなソーシャルメディアは、BBCや他の伝統的な報道機関が個々のイベントに遅れを取らないように取り組んでいたように、一つの重要な資源となった。抗議者たちは即座に市民ジャーナリストやコンテンツ・プロバイダーになりえた。それは、ニュースや情報を共有するために彼ら自身のカメラや電話を用いたから実現したのであった。その結果、イベントはしばしば海外のメディア機関によってライブ中継されたのであった。

> 権力の領域と記憶の行為

緑の運動は、ポスト宗教的社会運動から手がかりを得ている。その運動は宗教的な図像や語彙を展開しているが、これらの要素は新しい表現において、宗教的な意味合いから自由となっていた。我々が心に留めておくべき一つのことは、国家の強力な構造は、彼らの支配を取り戻すということである。抵抗の努力はしばしば忘れ去れている。それは、空間や機会が、国家によって抵抗活動を無益なものにさせられることによって奪還されたときである。選挙後の抗議の後、その抵抗活動は休止させられた。すなわち、携帯電話は遮断され、テキストメッセージは監視され、そして最終的には緑の運動を象徴するものを身につけることが禁止されたのであった。テヘランの人々の集会や群衆はまばらになり、隔てられた。運動が始まって6

ヶ月後、抵抗のすべての兆候は街の通りから取り除かれ、人々は日常に引き戻された。同時に、水面下における兆候、落書き、そして最も重要なことである記憶の行為は、抗議を広めるためのメカニズムとしてまだ生きていた。新しいアンダーグラウンドな文化が、物語を紡ぐような人々とともに生まれたのであった。²(仲修平訳) ■

¹ De Certeau, M. (1984) *The Practice of Everyday Life*. Berkeley: University of California Press.

² <http://www.irangreenvoice.com/article/2010/apr/18/2594>

³ I would like to thank Ali Sabbagi and Halima Adam for their excellent editing of the English version of this article.

> The Violence of Egypt's Counter-Revolution

エジプトの反革命における暴力

by Mona Abaza, American University of Cairo, Egypt
Mona Abaza, (エジプト、カイロ・アメリカン大学)



Icon Martyr Khaled Saidはムバラク政権下の警察官によってアレクサンドリアで殺害された。Saidの殺害は2011年1月におこった革命の引金ともなった。拷問にあつて壊されたSaidの顔は、数々の風刺画や写真で描写された。写真: Mona Abaza。

ムスリム同胞団政権が生み出す、目眩がするような日常的暴力のなかをどのように生き抜いていくかを、いま多くのエジプト人が考え続けている。このことは、2011年1月からの過去2年間に関して我々に再考を迫る。ムバラク派の腐敗した行いを単に再生産しているだけの——ただし、髭を生やしている——現在のムスリム同胞団政権よりも、軍事政権のほうがまだ耐えられるかもしれないという考えを我々は弄ぶようになった。

無数の記事、論評、トーク・ショウが現政権をイスラム教ファシストと呼び表しているが、この呼び名は、ヨーロッパの歴史には検討を要する類例があることを我々に思い起こさせてくれる。

とはいえ、軍事政権になるにしろイスラム主義政権のままでいるのにしろ、昨今の観測によると、我々が考えていたよりもっと早い時期に軍事クーデターが起こるかもしれないといわれる。ひとつは、

>>

いまだに両勢力が分業を取り決めて支配を続けているからである。同胞団は一般市民の暮らしの前面に立ち、軍部は舞台裏で活躍しているのだが、両者のあいだの緊張度は高いままだ。もうひとつは、同胞団と陸軍がシナイ半島に関して方針が対立しているという点である。前者の超国家的な野心と後者が重視する国家の利益とがぶつかるために、結果的に開戦に至るかもしれない。

いずれにしろ、エジプトでは過去数カ月にわたって、組織的殺人、誘拐、辱め、略奪、路上での引き回し、死に至る殴打、再び大量に起きた抗議参加者の顔を故意に傷つける事件など、極端で恐るべき瞬間の数々が目撃されてきた。他方で、犯罪と略奪から市民を守るはずの警察が不在のなか、「民衆による正義」という形態が優勢になっているように見える。スラムの住人たちが、警察署に散発的に攻撃を加えることは言うまでもなく、暴漢や泥棒を集団で殺したり、生きたまま焼き殺したり、公衆の面前で殴り殺したりして、自分たちが復讐を果たしているのだ。

以上を踏まえ、この小論では、異議申し立てという新しい公共文化を求める闘いにおける身体の位置づけについて再考してみたい。異議申し立ての良い例が、2013年1月にモルシ政権がポートサイドに出した外出禁止令に対する反応だ。ポートサイドでは、街全体で政権からの命令を無視し、サッカー・ゲームのトーナメントやその他の公開イベントが企画され、大勢の民衆が街に繰り出すことになった。人びとは街頭に出て、陽気にお祭り気分ひたした。わたしが本稿を執筆している3月初旬現在、ポートサイドの街のほぼ全域で市民的不服従が続いており、これまで以上に強い民衆の支持がそれを支えている。

モルシが権力を握って以来、エジプトでは、革命反対派の殺害や誘拐、四肢切断が増加してきた。都市部において途切れることなく続いている警察と抗議参加者との抗争・衝突において、公衆の面前でこのような暴力が行われることが続てきたのだ。その勢いは増しつつあり、恐るべき規模に達しているため、現在のイスラム主義政権下での露骨で無頓着な人権無視に比べれば、追放された独裁者ムバラクはまだ心優しかったというジョークが流行っているほどだ。在職期間8カ月ですでに、モルシ大統領はエジプト中で100名に上る殉難者を犠牲にした(ポートサイド、アレクサンドリア、イスマイリーヤ、スエ

ズ、ラファフ、マンスーラ、マハッラ・アル＝コブラといった街やそのほかの市で起きた衝突。タハリール広場で2012年に起きたモハメド・マフムード通りでの衝突、大統領宮殿での事件など。カイロはここに入っていない)。2013年1月25日以降をとっただけでも、ポートサイドで43名が殺されている。!

いま、多くの人びとが疑問に感じていることがある。「ムバラク政権下の無数の出来事も同じように、警察の残虐性と彼らが行っている拷問を証明してはいなかったか?」と。革命の引き金をひいたアレクサンドリアのハーリド・サイードの殺害を思い出そう。それ以前に警察署で起きていた夥しい数の拷問の事例も忘れてはならない。これらがまさしく、2011年に1月革命が起きた理由ではなかったか? そうならば、現在、一体何が新しいのだろうか?

人間の尊厳の回復を求めて発生した革命のまさにその後、あらゆる種類の人間の尊厳が、公衆の面前で繰り返しかつ組織的に侵害されている様を、我々はいま目撃しているのだ。この点がおそらくムバラク時代とは異なる。身体への集団的辱めが、革命を守ると主張した政権そのものによって行われている。こういった出来事を即座に拡散するメディアのおかげで、残虐性が人びとの目に晒されることには確かに、強力な効果がある。また、ムスリム同胞団のイスラム主義者たちは、以前はムバラク政権の犠牲者だった。彼らは革命を乗っ取り、彼らの信奉者を要職に据えて、おそらくこれまでなかったくらいに必死にこの国を同胞団化しようと試みている。彼らの長期的な目的は、神政国家の樹立である。それにも拘わらず、イスラム主義者たちは自分たちの敵手である旧政権と全く同じ言説・手法・手順の再生産に陥ってしまっている。ただし違いは、イスラム主義者たちは街頭ではより残忍にさえならなければならない点である。

ここ数カ月のあいだに、同胞団の二流の模倣と破綻した手口に対して、集団的な怒りでないとすれば、集団的な当惑が生じてきた。この点は、反革命の成功の原因についての興味深いケーススタディを提供している。またおそらくこれは、最近になって複数のエジプト人精神病医がポスト・ムバラク派たちの分裂的性質を指摘している理由でもある。ムスリム同胞団は、イスラム教に基づいた道徳と清純を求める一方で、男女を裸にする、抗議参加者を引きずり回す、殴る、蹴る、その顔を

傷つける、もしくは単に殺すといった、最もひどい身体への侮辱を公然と先導している。イスラム教主義民兵たちは若い世代の革命参加者に対し、大統領宮殿で若い男女の手足を切断して拷問にかけるといふ、むごい仕打ちを行った。そのやり口を見て、多くの人びとが次のように問うている。このような行為は、身体へのサディスティックな傾向を反映しているのだろうか、もしくは権威主義体制が長い間煽ってきた権威主義的なカウンターカルチャーに由来する、ある種の社会的騒乱の噴出なのだろうか、と。

ムスリム同胞団が武装した民兵を送り込んで、大統領宮殿で平和裏に抗議していた抗議参加者を殺させ、また拷問部屋をつくらせて以来、暴力は質的に新しい水準に達した。ムスリム同胞団は、抗議参加者のあいだに恐怖を広めるために、その暴力を公然と晒した。事件は12月5日に起こった。大統領の保護を口実に、公開殺人を行って、民兵たちが恐怖を蔓延させたのである。このときのメディアによる生中継は、殺人を瞬時に伝えたために、衝撃的だった。人びとはテレビで、抗議参加者が標的に定められ、組織的に身体を切り刻まれる様を見ることができた。その夜、抗議参加者に対し武装民兵が実弾を使っている映像を、複数の衛星放送チャンネルが流した。CBC+2は一晩中、公安当局が群衆の中から若者を誘拐し手荒に殴り殺す映像を放映していた。しかしそれでも、そのとき多くの人が問うた。「これの何が新しいのか?」と。繰り返しになるが、ムバラク時代にすでに暴力はそこにあったのだ。

ポートサイドにおいて、スナイパーが抗議者だけではなく通行人や葬儀で棺を担いでいた人びとまで直接殺した証拠を、YouTubeでは数多く見ることができる。民兵が使う拷問部屋も映像に納められ、拷問は人びとに知られることになった。300人か400人ほどの暴漢によるタハリール広場での集団レイプ——その前月には約20名の女性が別々の機会に犠牲になった——は、女性の勇気を失わせるために、政権が繰り返し使ってきた戦術である。若い革命家たちが誘拐され、拷問を受け、瀕死の状態で見つかる事件は、毎日発生している。民衆潮流党(Egyptian Popular Current)に所属していた若きモハメド・ギンディも、このようにして今月殺害された。当局は、彼は自動車事故で亡くなったと主張しているが、反対勢力のメディアや報道陣、人権団体は、暴力の質的水準で起きている変化と

>>>



革命博物館はタハリール広場での殉教者を紹介していた。この博物館は、ヘリオポリスの大統領府を模したものであった。タハリール広場は警察によって幾度となく急襲され、博物館は消滅した。

¹ Al-Tahrir, February 16, 2013, p. 9.

² The Egyptian Initiative for Human Rights, February 19, 2013,

<http://eipr.org/pressrelease/2013/02/19/1635>

³ Tadros M. "Signs of Islamist Fascism in Egypt?," December 8, 2012, <http://www.opendemocracy.net/5050/mariz-tadros/signs-of-islamist-fascism-in-egypt>, retrieved February, 14, 2013.

⁴ Al-Tahrir, February, 12, 2013.

⁵ Al-Tahrir, February, 12, 2013.

⁶ Al-Tahrir, February, 14, 2013.

⁷ Salem M. "The Horror," Daily News, February 11, 2013, <http://www.dailynewsegypt.com/2013/02/11/the-horror/>

⁸ Ali N. al-Shuruq, February, 15, 2013.

して、誰であれ、同胞団に反対する者を永遠に沈黙させることを目的とした「系統だった」組織的な戦略を挙げている。タハリール広場にいる集団レイピストを考えてみよう。レイピストたちは円になって動き、女性を集団から離れさせて一人きりにした後、女性の服を剥ぎ取って裸にし、責め苦を与えた挙げ句、膣にナイフを突き刺して、最陰部に最大限の痛みを加える。年若い少女たちの一部が手足を切断され重傷を負ったことは、モルシによって完璧に無視された。また、こうした出来事が判を押したように繰り返されているという事実も考えてみよう。さらに諮問評議会が、そもそも女性がタハリール広場で抗議活動に参加するべきではないのだから、女性こそ集団レイプに対する説明責任を負うべきであると書かれた法律を通過させようと煽り立てるのだとしたら、このことは、たったひとつのことしか意味しない。つまり、この政権はいま、犯罪を合法化しようとしているということだ。

また、組織的抹殺によって、4月6日運動のメンバーたちや複数のfacebook管理者が殺され、そのほかにも死の脅迫を受けた者たちがいる。マハッタ・エル＝コブラにおける労働者たちの抗議活動を組織したリーダーたちも、拷問を受けた。² 子どもも拷問からは逃れられない。トーラ監獄とアル＝グアバル＝アル＝アフマルのキャンプで、約114名の子どもが投獄されているという報道があった。長い間我が子を探し続けていた親たちが、ようやく牢獄で見つけたときには、残酷な拷問によって四肢が切断されており、自分の子だとわからなかったというニュースを放送で聞く

のは、痛切なものである。話はこれで終わりではない。タハリール広場でサツマイモを売っていた貧しい歩き売りの12歳の子どもが2発の銃弾で殺されたというニュースが流れたときも、国中が動揺した。子どもは兵士によって狙い撃ちされたと判明したにも拘わらず、メディアでは、彼は誤って撃たれたと発表された³。しかも公式メディアでは、彼が12歳の貧窮したストリート・キッドだった事実は全く触れられなかったのである。

一部の論者たちは、こうした暴虐は新しくはないことを我々に思い起こさせる。事実、ブロガーのサンドモンキー⁴とストリート・チルドレンについて研究している文化人類学者のネリー・アリ⁵は、恐ろしく聞こえるかもしれないが、同一の考えを述べている。つまり彼らによれば、エジプトが現在経験しているのは、ムバラク政権が行っていたことの継続以外のなにもでもない、と。ストリート・チルドレンがレイプ、拷問、組織的殺人の標的になってから、ずいぶん経つ。同様に、エジプトの牢獄が強制収容所になってからずいぶん経っている。変わったのは、中流階級の人びとが、日常的にこのような恐ろしい事実に遭遇しているということだけである。もはや、彼らの息子たち、娘たちも暴虐を免れない。過去数カ月間、現政権の犠牲者はほとんどの場合、きちんとした格好をした中流階級の若者だった。それはまるで、年長いた家長である怒れる政権が、必死の生き残りを賭け、若く美しい体を生け贄にし続けなければならないかのようなのである。(小杉亮子訳) ■

> How Indian Universities Become Profit Machines

インドの大学はいかにして収益マシーンになったか

by Satendra Kumar, Delhi School of Economics, Delhi, India
Satendra Kumar (インド・デリー、デリー・スクール・オブ・エコノミクス)



Uttar Pradeshで、信任ビジネスを謳う広告。

チャウドリー・チャラン・シン大学(CCSU)は1966年に設立された。その名は、地元出身の農民指導者であり元首相だった人物にちなんでいる。CCSUは文系・理系の修士、哲学修士、博士のコースを提供していた。さらに、CCSUと提携していたカレッジは、文系、理系、経営・管理(大学院とポスドク)の分野にまたがり、55に上った。この大学の教育の質は低く、教室は常に超満員、必要な設備も欠いていたが、一方で、多様な階層とカースト出身のらびとに多数の領域にわたって教育を提供するという、称賛に値する事業をそれでも成し遂げていた。しかし、2000年代初頭に事態は劇的に変わってしまった。政府の政策変更と大幅な予算削減を受け、CCSUは最初は学内の各研究科に、のちに提携している州立カレッジに対し、自己資金での職業教育コースを運営する認可や許可を与えることで、資金を調達し始めたのである¹。

世界中の大学が、規制と商品化という二重の圧力に直面している。インドの大学も例外ではない。1990年代後半、高等教育機関は授業料の値上げや民間からの寄付の募集、コンサルタント業やそのほかの活動による増収によって自ら財源を増やす努力をしなければならないと、グローバルな潮流と世界銀行の命令に従ったインド政府が発表した。公共支出への圧力を和らげることが必要だというのが、政府がこの決断の正当化に使った理由だった。2000年4月には、教育セクターの改革を提案させるため、ムケーシュ・アンバーニー氏とクマール・マンガラム・ビルラ氏が率いる委員会を首相貿易産業委員会が設置している。この委員会がのちに提出した案は、教育を非常に利益率の高い市場だと捉え、政府の役割を初等教育に限定する一方で高等教育は民間セクターに任せるように、というものだった。つまり2人の産業家が主張したのは、高等教育の完全な商品化だったのである。これ以降、高等教育の予算が減らされ、正規の教員・職員の雇用はほとんど停止された。以下でわたしは、いかにしてこの商品化がウッタル・プラディッシュ州メーラトの公立大学を巧妙に取り崩し、頹廢した民営の教育システムがそれに取って代わるようになったのかを論じたい。

職業教育コース運営の認可を民間セクターに与えるCCSUの計画が発表されると、地元の経営者の多くが新しいカレッジを開設し始めた。時をおかずに、この計画は、教育を受けたものの職に就くことができていなかった若者の注意もひきつけ、彼らの一部がコーチング・センターの運営を開始した。さらにCCSUの計画は、大学官僚と政治的支配層に近い地元の政治指導者の関心も捉えた。こうして一夜にして、一部屋だけのコーチング学校の多くが職業教育カレッジに変身してしまった。それだけでなく何千エーカーもの土地が農民から端金でかすめ取られ、公用地に変わり、地元の実力者によって政治家に割り当てられた。政治家はそこに、公益信託を用いてカレッジを設立した。政治家たちは、「黒い金をきれいな金に」変え、社会奉仕の名のもと納税を逃れる方法をこのようにして見つけたのである²。10年もしないうちに、メーラトの都市部・農村部や近郊の街には、350以上もの私立カレッジが設立されることになった。CCSUはカレッジに対し、エンジニアリングや経営・管理、薬学などのさまざまなコースを運営し、教育学士を授与する認可を与えた。他方、これらの私立カレッジが、人文学や社会科学、哲学のコースの開設に関心を示すことは滅多にない。結果として、大型の総合公立大学から、ただ取

>>

益を上げることが目的としている私立カレッジに認可をばらまく装置へと、CCSUは落ちぶれてしまったのである³。

州が公立大学を解体し、その代わりに民間セクターが急激に成長したことは、教育の質と社会正義に、多くの恥知らずな帰結をもたらしている。当初、私立大学開設に関する政府の指針を無視して、多くのカレッジが設置され、運営されていた。その結果、何百ものカレッジや施設が、適切な設備と資格を持った教員を欠いたまま、運営されていた。現在は、書類上は学生が登録されているにも拘わらず、授業が開講されていない施設まである。こうしたカレッジは既存の規則を蔑ろにして、多くの貧しい下層階級出身の学生には払うことができない高額の頭割り授業料を課しているのである。

貧困層や下層階級・下層カースト出身の学生に手をさしのべるために、指定カースト出身学生の職業コースへの入学を認められた大学に対し、政府はフェローシップと助成金を支給してきた。しかし現在この制度は、社会正義の実現を促すよりもむしろ、制度を自らの利益のために弄ぶ私立カレッジのためのものになってしまっている。メーラトでは多くのカレッジや大学が、いわゆる「コンサルタント」(ブローカー)を雇い、周辺の村々や都市部の地区を各戸ごとにまわって、指定カーストの学生のリストを作成させた。こうして見出された指定カーストの学生たちは、政府が補助金の対象としている職業コースへの登録を依頼された。たいていの場合学生たちはこうしたコースに関心を持っていなかったが、いずれにしろ書類上は登録される結果になった。さらに、学生の多くが、気付かないうちに複数のカレッジに入学させられていることもあった。前者の場合には、学生たちはフェローシップの恩恵に預かって授業に出席することなく学位を取得でき、カレッジの経営者も多額の助成金を受け取ることができる。後者の場合には、カレッジの経営者とコンサルタントが受益者で、学生たちにはなんの利益もない。このようにして、多額の公的資金が民間セクターへと流れ込んだのである。

さらに私立カレッジは、票を集めるための政治装置にもなっている。あまたの政治家が、農村部や半農村部に職業教育カレッジを開設したが、彼らの多くにとって、動機のひとつは安価な農地の購入だった。それにも拘わらず、こうした政治家たちは自らを社会奉仕の人として演出した。自らのカーストの同胞を助けるだけでなく、いまだに教育機関がほとんど存在しない農村部に住む、さまざまなカーストや階層の人びとを助ける社会奉仕の人として、である。高額の頭割り授業料を払うことができない貧しい両親や職探しに苦闘する教育を受けた若者たちに恩を売るための道具に、私立カレッジがなってしまったのだ。選挙になると、こうし

た親たちや若者たちは、自分たちの恩人である政治家のために選挙運動を行い、投票するのである。

ここまで見てきたように、インドでは、公的資源が実際には民間セクターの拡張に資金を提供してきた。民営化は、上位・中位カーストに属するカレッジ経営者という富裕層を生み出しただけではなく、高等教育へのアクセスにまつわる不平等をさらに深刻化させた。私立カレッジの卒業生の大部分が、さらに資格を得るために別のコースに入学するか、もしくは給料が非常に低い職に就いて終わっている。また指定カーストや貧しい学生たちは、私立カレッジの迷宮に取り残されている。民営化の結果は、階級とカーストの再生産であり、知識のまったくの道具化と言っている。わたしがこの現象を調査したのは、メーラトとウッタール・プラディシュ州西部のみである。しかし、インドの他の地域においても、国家による規制が賄賂やそのほかの汚職で裏をかかれているとしたら、公教育の民営化は同様の帰結をもたらしているのではないだろうか。そしてこのことは、国家が便宜を働き積極的に支援することによって、公共財が民間のプレイヤーに移転されている世界的潮流に通じているのである。(小杉亮子訳) ■

¹ In the self-financed courses a student was supposed to pay more than usual on user-fee grounds, but infrastructure such as buildings, teaching staff, and libraries were provided by the university in these campus-run but self-financed courses. In short, the government was providing public resources to fund private education.

² Running an educational institution comes under social service. It is considered a non-profit activity and is non-taxable.

³ A capitation fee is an unofficial payment, which, in India, is often necessary for admission to institutions of higher education.

> German Sociologists Boycott

Academic Ranking

ドイツ社会学者によるアカデミック・ランキングのボイコット

by Klaus Dörre, Stephan Lessenich, and Ingo Singe,
Friedrich-Schiller-University, Jena, Germany

クラウス・デーレ、シュテファン・レーゼニッヒ、インゴ・ジンゲ(ドイツ・イエナ、フリードリヒ・シラー大学)



フリードリヒ・シラー大学イエナの修士課程の学生であるJohanna Sittelは、その他多くのドイツ社会学者たちとアカデミック・ランキング・システムに対する全国ボイコット運動に参加している。

世

界中の大学や高等教育機関は、構造的な変化の影響を受け、大学の企業主義によって牽引されている。新たな公的マネジメント主義を課すということは、大学がますます民間企業のように経営管理されるということである。資源は、実績と目標協議にしたがって配分される。アカデミック・キャピタリズムはドイツにも浸透し、その主たる指針はuniversity department rankings and league tablesである。大学の仕事が量的な実績の重視(調査資金、博士号取得者と大学院生の数)と質的な基準の軽視というよくない方向に向かっている。学界の仕事は、目的と内容の両方で根本的に変化している。経営責任が増大したことで、教育と調査はますます困難になっている。際限なく実績を増やすことに付随している段階的な拡大のロジックがあり、その結果として、仕事を増やしたり、仕事を増やすような圧力がかけたりして、学界に関わるすべての人々の集団に対して負荷がかかることになる。調査と教育の質に対する負の影響がますます感じられる。

それゆえ、ドイツ社会学会(GSA)は、ドイツ語圏で最も影響力のランキングである2013年の高等教育発展センター(Center for the Development of Higher Education=CHE)のランキングをボイコットすることで、アカデミック・キャピタリズムに反対する姿勢を示すことを決めた。大学の評価基準の中には、教育と調査の質、学生の評判、科学的基盤、そして国際的な視野といったものがある。この目的のために、データ(例えば第三者の資金提供に依拠したもの)が大学理事会から集められ、学生も評価対象となり、何人かの教授もまた調査されている。結果は、非常に権威のある週刊のデー・ツァイト(Die Zeit)との協働で出版され、確実に科学官僚だけでなく大学の理事会でも参照される重要なものとなっている。

ドイツ社会学会は、高等教育発展センターのランキングに参加

>>

しないように、学部、教師、そして学生に訴えた。まずは、イエナにあるフリードリヒ・シラー大学の社会学研究所が率先して行った。この大学の社会学部は、連盟のリストで最も良いランキングの中に入っていたが、そのランキングに参加しないことを公に宣言することで、こうした強硬な姿勢をとっていた。2011年のランキング結果が出版された後すぐに、その宣言が発表されたのだ。学部の宣言は次のようなものだった。

「ディー・ツァイト で発表された2011/2012の高等教育発展センターのランキングでは、フリードリヒ・シラー大学の社会学研究所はトップにランキングされていた。我々の仕事がこのように評価されたことは喜ばしく思う。しかし、我々はそのような大学のランキングに懐疑的である。たった一つの理由であるが、すなわち、不完全なデータに基づいてかなり多くの研究所がランキングされているため、我々は高等教育発展センターのランキングの情報価値は低いと考えている。なによりも、大学ランキングは学界で競争文化をつくる道具となっている。それは勝者と敗者をつくりだすが、科学的な仕事の質を改善する手助けとはなっていない。それゆえ、社会学研究所は、今回のこのランキングには参加しない予定である。すでに述べているように、我々はその問題にともに取り組むために、ドイツ社会学会の評議委員会と協議するつもりだ。このような状況で、科学的な質を保証するための適切な手段や、学生にドイツの大学には様々な社会学のプログラムがあるという情報を提供する方法について意見交換する必要がある。」

新聞で大きく取り上げられたボイコットには、ドイツ社会学会とドイツの大部分の社会学部が参加した。また、そのボイコットは他の学問分野の人びとも賛同している。歴史学者、英文学者、化学者、教育学者、そして政治学者も、当分の間、高等教育発展センターのランキングに参加しないことを決定した。

ボイコットは、大学管理側からは明確な支持を得られてい

ない。そして、ドイツ社会学会は、原則的には実績評価を拒むわけではないこと明らかにした。かくして、ドイツ社会学会評議会は、2012年10月、もっぱら学生への説明のための別の情報システムを作成することを決めた。また、ドイツ社会学会評議会は、根拠のある評価メカニズムをつくるための、代わりとなる方法について議論するための「研究評価部門(Task Force Studiengangsevaluation)」と呼ばれているワーキンググループを立ち上げた。2013年夏季には、ボイコットは激しい段階に入るだろう。今後数か月で、そのボイコットが多くの学生や教師に支持されているかがわかるだろう。今すぐには結果はでないだろうが、イエナやそれどころかドイツの社会学者は、その宣言に従ってランキングをボイコットするよう国際的な科学団体に訴えている。

詳細は以下のサイトをご覧ください。www.soziologie.de/che
(小坂有資) ■

> Kidnappable: On the Normalization of Violence in Urban Mexico

誘拐されうる者——メキシコ都市部における暴力の標準化

by Ana Villarreal, University of California, Berkeley, USA
Ana Villarreal (米国、カリフォルニア大学バークレー校)



Ana Villarrealの報告でとりあげられた、31歳の事業主であり熱心な猟師のフェイスブック掲載プロフィール。この人物は2012年に彼の会社オフィスから誘拐された。彼の家族が数々の身代金を支払ったにもかかわらず、彼は一週間後、高速道路のそばで射殺された状態で発見された。このような状況を恐れ、Monterrey在住の事業主は遠く離れた場所から事業の推移を見守ることを決意し、オフィス自体は自宅のそば、もしくは自宅に移すこととした。

力
ロリーナは7歳になる娘を連れて、映画館へ『ラプンツェル』を見にゆき、そのことを非常に後悔することになった。その日以来、幼いマリアーナは、誰かが寝室の窓にまで忍び寄ってきて、彼女を誘拐してしまうのではないかと恐怖にとりつかれてしまったのだ。「おうちの外に悪い人たちがいるのよ、私にはわかるわ」。モンテレー(メキシコ)の裕福な地域の一角で、バルコニーでコーヒーを飲みながら私のインタビューに答えていたカロリーナに、マリアーナはそう話していた。「そう、だけど心配することなんてないのよ」カロリーナは娘に繰り返し言い聞かせている。「ひとつ、ここはお城ではないわ。ふたつ、あなたは魔法の髪を持っていないもの。みつつ、あの当時は門やアラームがなかったし、両親が子供から離れて寝ていたけど、私たちはあなたの隣の部屋に寝ているもの」。自分が学校やジムや親戚からいつも見守られているということをマリアーナに理解させるためには、多くの想像力を必要としていた。「くそつたれのデイズニーめ、どうして子供が誘拐される映画なんて作るんだ」——カロリーナは憎悪の気持ちから毒づいた。

映画『ラプンツェル』は、非常に多くのメキシコ人に、「誘拐されること」の恐怖を呼び起こす引き金となった。メキシコの北東部に位置し、工業ハブ都市として450万人が暮らすモンテレーのような都市においては、上流階級の人々ほど誘拐の被害にあいやすいというのが、あらゆる階級を通じて共通の現象となっている。起業家精神のあふれる町として、モンテレーが国際ニュースのヘッドラインで称賛される一方で、モンテレーは近年、麻薬と暴力の温床としてもニュースになっている。吊るされた死体の写真や、高速道路の側で首なし死体の山が発見された記事が、無数の言語で世界に報道されているのである。麻薬による暴力が他の形態の犯罪暴力よりも人々を憤慨させている一方で、地元の人々にとっては、それは単なる不快な出来事として、ニュースの見出しにもならないままでいる。

メキシコシティのシンクタンクが実施した近年の調査によると、誘拐は、殺人よりも組織的な犯罪であることから、市民の不安感に最も影響を与えている犯罪行動であるという(CIDAC 2012)。誘拐に関して言えば、誘拐犯に対する直接的な恐怖からというよりも、法律や警察、司法組織に対する信頼が低いために、被害者やその家族が誘拐事件のことを報告したがない傾向がある。このため、誘拐についての公的な犯罪統計は特に信頼のおけないものとなっている。しかし、利用可能な犯罪統計の慎重な修正と犯罪被害者調査(México Evalúa, 2011)によって、モンテレーの位置するNuevo León州とメキシコ全土の両方において、誘拐率が増加傾向にあることが明らかにされている。ここで私は、メキシコ都市部において誘拐がどれだけ普通のこととしてとらえられているかを測る指標として、変化しつつあるモンテレーでの日常生活において暴力が増加していることを、現在実施中のフィールドワークから描いてみることにしたい。

ご存じのとおり、暴力は日常の行動や言語の領域にあらわれることで標準化されていく。言語に関して言えば、この2ヶ月間、誘拐事件の増加ということに対する反応として、人々から、少なくとも中流・上流以上の階級の人々から、ある言語的な変化を耳にするようになった。それは人々が、自分たちがsecuestrableであるか否かということ定義するようになってきた

ことである。secuestrableというのは、「誘拐されうる者(kidnappable)」という意味である。私がこの言葉を初めて耳にしたのは、2013年の1月25日金曜日にインタビューした43歳の上流階級の女性であるルシアからである。彼女は都市の郊外に位置する別荘を訪れて、自分と家族の不安を追いやることを決意していた。別荘は広いプール付きの二世帯住宅で、たくさんのオレンジの果樹と守衛、そして守衛の家族に取り巻かれており、1年半以上の犯罪歴または軍隊所属歴のある者が訪れることができない地域に位置しているのである。「私は『誘拐されうる者』だから、家族は私にここから出てくるなって言うのよ」——彼女はビールを飲み、お腹を日差しに晒しながら私に語ってくれた。「誰だって十字砲火に出くわす可能性はあるでしょ、私にも経験があるけど。だけど外に出なければその心配もないし、むしろあなたの方も、一人でいれば誘拐される可能性のある『誘拐されうる者』だから、身代金を請求されかねないわよ。」

2回目に私がこの単語を聞いたのは、サンチャゴの湾口部に住む中流階級の市民である28才の男性からである。2013年2月26日火曜日のインタビューで、彼はこう説明してくれた。「私は自分が『誘拐されうる者』でないということを知っています。私の月給はおよそ1万7千ペソですから、それで私の銀行口座に十分なお金が入っていると本当に思いますか？ 私の月給が10万ペソとか、20万ペソであったなら、私は自分が『誘拐されうる者』であると思うかもしれません。私の愛車は、2002年式の古いキャバリエですしね」。この車という点は重要である。モンテレーの住民の多くは、より個人化するライフスタイルの一部の現れとして、自家用車を買っているからである。BMWをサンチャゴの友人の1人に売却したこの男性のように、サンチャゴでの暮らしは不安をもたらすものであった。彼は、そのBMWが安値で買い取った中古の車だと言うが、サンチャゴの友人の話によれば、誘拐犯はそのことを知らないのだと言う。友人は彼に繰り返し以下のように伝えていた。「彼らは君を誘拐することができる。その時、どうやって身代金を支払うつもりなんだい」。つまりここでは、『誘拐されうる者』であることに留まらず、『誘拐されうる者』と見なされないようにするということが、人々の関心になっているのである。

この文脈において、動詞「secuestrar(誘拐する)」が形容詞「secuestrable(誘拐されうる)」に変化するという現象によって、暴力の標準化を観察することが可能である。高い誘拐率は、犯罪との関連から新しい形の社会階層を作り出しているのである。つまり、自身が誘拐される可能性がある人と、そうでない人という2つのグループに、人々を分割しているということである。ここで『誘拐されうる者』になるということは、人々にとって自分自身の重要な特徴になる。『誘拐されうる者』であるということは、消費生活やスケジュール、仕事や移動の手段を決定する能力があることを表すからである。このことについて、筆者は現在論文を作成中である。

「子供たちは、こんな誘拐事件が起こっているということを知る必要はないんです」と、インタビューの終わり際になって、カロリーナは子供たちに言及してこう付け加えた。「私はこれからも、この泡と消えそうな夢のような計画を保持して、子供たちとその子供時代を守りたいと思っています」。カロリーナは自分が『誘拐されうる者』であるとは思わないと言う。しかし、彼女が現在住んでいる裕福な地域を離れないよう注意深くなっているともいう。彼女はもうカルティエの腕時計をしないし、派手な車を運転することもない。また、新聞も読まないし、テレビでニュースを見ることもない。夜に出かけることはめったにないし、つきあいのある人々は学校の友人と家族のみで占められている。彼女はこれらの矛盾についてしっかり把握しており、マリアーナのために泡と消えそうな夢のような計画を実践していきたいと同様に、自分自身のためにもそうしていきたいと思っている。我々のインタビュー終了後に、彼女はさりげなく付け加えた。「紛争地域に住む人々って、どうやって生活しているのかしらね。どうやって生きて、どうやって不安な気持ちをコントロールしているのかしら。きっとひどい生活なんですよわね」。(姫野宏輔訳) ■

References

- CIDAC (2012) 8 Delitos Primero. Índice Delictivo. Centro Integral para el Desarrollo, A.C.
México Evalúa (2012) Indicadores de víctimas visibles e invisibles de homicidios.

> Social Fragmentation among Mexican Youth

メキシコの若者における社会的分断

by Gonzalo A. Saraví, Center for Research and Higher Studies in Social Anthropology (CIESAS), Mexico
ゴンザロ・A・サバリ(メキシコ、社会人類学研究・高等教育センター(CIESAS))

不平等はメキシコ固有のもの
のようだ。穏やかな経済成長
といくつかの社会指標の改善
がみられた10年の後でも、
国はかなり高いレベルの社会的
不平等を示し続けている。教育の
一般的な水準が向上し、いくつか
の基礎医療サービスは拡大し、
“Oportunidade”のような条件付き
の現金譲渡プログラムはいまや
総人口の5分の1近くになる
500万世帯以上をカバーしている。
それでも、こうしたプログラムの
貧困削減への貢献は、ささやか
できわめて矛盾したものだ
った。

それにもかかわらず、国際的な人間の
福祉の目標を達成するための、これら
やその他の進歩指標の背後に、根強い
不平等がある。矛盾した傾向の中で、
「不均等な包摂」の新たな形が出現
している。特権と欠乏が隣り合って
存在し、互いを無視し、暗に互い
を受け入れさせようとしている。
不平等は不均等であるだけでなく、
社会的・文化的にかけ離れたもの
を包摂する空間を通じて、社会構
造の分断にむけての質的な変化
をもたらす。

分裂の過程は、成人期への移行を
検討すると明らかだ。幼児期と若
年期はライフコースにおいて重要
な時期だ。一方で、このステージ
での機会や制約は、その人の将来
の幸福に向けた可能性や条件を
規定する。他方で、この時期は
成人生活において社会・文化空間
にどう交わるかを規定するであ
ろう社会化や主体化の重要な時
期でもある。このトピックに関
する文献は、構造的な不平等や
それが作動

するメカニズムについて重要な示
唆を提供してきたが、不平等が
社会的分断のプロセスをどう導
くのかについてはそれほど知ら
れていない。成人期への移行や
若年期の経験は、構造的な次元
と社会文化的な次元の両者で
社会的分断の理論を探求する
典型的なプロセスである。

“The possibility
of encounters
across class is
almost zero”

階級の異なる人が
遭遇したり
社会経験を
共有したりする
可能性は
ほとんどゼロである。

メキシコにおける教育へのアクセス
は、過去数十年の間に大いに拡大
してきた。1990年と2010年の
間に、基礎教育の対象(9歳まで)
はほとんど一般的なものになり、
25歳～29歳の人たちの平均的
な教育年数は7.9から10.2に
伸びた。加えて、直近では2011
年に12歳に達するまで義務教
育期間が延長されるといった、
いくつかの制度改革がなされた。
しかし同時に、教育システムは
深刻な分断に見舞われてきた。
つまり、特権階級の子どもと
若者は、同じ私立学校に通い、
学校と家庭で学習する質量とも
に優れた資源を得、質が高くバ
リエーションに富む教

育を受ける。貧困層でも、子
ども達や若者は社会的に同質
の学校に通うが、社会資本・文
化資本がほとんどない家庭出身
の学生をサポートする設備は劣
悪で、教育上の資源も少ない。
結果として、教育達成スコア
はかなりの違いを見せる。例
えば、2006年のPISAの科学の
試験で、上位4分の1の学生では
25%しか社会経済的・文化的
指数で落第しなかったが、この
割合は次の4分の1の学生では
56%に上昇し、下位4分の1
では71%に上昇する。

分断の影響は教育達成に限った
ことではない。それは学校での
経験や教育の意義にも広がっ
ている。特権層の子どもや若
者は、学校は完全に閉じた経
験を示す。彼らの生活の大部分
は学校で行われ、学校によって
形作られる。学校は、社会化、
アイデンティティの形成、文化
資本の形成の際の最も重要な
場所となる。学校で作られた
同一性や社会的ネットワーク
は他の場所にも拡張され、幼
少期から成人期まで長く続く。
学校は彼らにとって成人期へ
の移行の唯一可能な道筋であ
って、教育上の経路は連続的で
直線的なものである。その一
方で、貧困層出身の子どもや
若者にとって、学校は他の活
動や義務と組み合わせなければ
ならない限られた経験である。
同時にそれは他の興味関心
や外的な条件に影響されやす
い。そのため、貧困層の子
どもの学校歴は、彼らが成長
するにつれて、他の進路に直
面したり移行や社会関係の場
面で学校が重要性を失うよう
に、断続的でバラバラになり
がちである。

教育における分断は、都会の分断と関連する。メキシコでは、地域の他の国と同様、大都市で居住住み分けの拡大が進行している。例えばメキシコシティの場合、貧困周縁層などはより広くより離れたところで生活し、特権階級は特定の区域で門のある排他的なコミュニティに集まっている。囲いと孤立はエリート層だけのものではない。都会の不安定さや都市の危険に促され、囲いと孤立は中間階級や上昇移動を志向する下層階級の人にまで広がった。

社会空間的な分断は居住住み分けを超えて、子どもや若者の都市経験や都会での社交にまで広がっている。住居、学校、買い物、娯楽施設は都会経験を規定する社会空間的な結節点として働く。つまり、それらは第1次的な空間的参照点であり、社会関係の中心である。この過程で特定の不平等な空間構造が作り上げられる。つまり、貧困層と特権層の若者はそれぞれ、自身の都会地図をもつとともに自身の空間での習慣行動をもつのである。

都市で生活するとはどういう意味をもつか、普段の都会生活に関する彼らの定義づけは、輸送機関、住居、通り、緑地帯、ショッピングセンターの特徴の文脈で構成されており、活動の仕方、着こなし、話し方さえ全く異なる。このことは異なる不平等な都市間に当てはまるだけでなく、相互に排他的でお互いを知らないような都市で属している空間の間にも当てはまる。

たとえ住み分けの量が減るとしても、都会での社会生活は、「他者」を避けること、出会いや関係の社会的同一性によって特徴付けられる。特権層の若者は、開かれた公共空間から撤退し、閉じたコミュニティ内で生活し、私立大学で勉強し、排他的なショッピングセンターやレストランで消費をし、自分の車で移動する。2

つの私立大学で私が話を聞いた20人の若者のうち、自分の車を持っていない者は3人しかいなかった。これに対して、公立大学で話を聞いた19人の若者のうち車を持っている者は1人もいなかった。後者では、その90%が先週1週間で3日以上、公共交通機関を使っていた。対照的に、特権層の若者では、同様の経験を15%の者(車を持っていない3人)しかしていなかった。

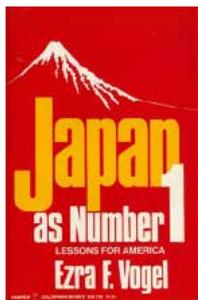
公共空間からの撤退はエリート層だけのものではない。他の社会階級にとっても同様に、閉ざされプライベートの安心感がある、新たな半公共空間が現れたのである。しかし開かれた公共空間は庶民階級に支配されている。階級の異なる人が遭遇したり社会経験を共有したりする可能性はほとんどゼロである。もっというと、都市の外で若者はほとんど何も無い空間や禁止区域を発見する。よそ者との交流は、それが避けられないときには、相互烙印化に支配されるか、もしくは統制された上下関係にはめ込まれる。

そのような社会的分断は2つの意味をもつ。1つ目は、前進、進歩を示す社会指標の背後に「包摂の不平等」の形が社会的同意をもって強固になっている可能性である。2つ目は、社会・文化空間が離れて相互に排他的に形成されていることが、共同責任ばかりでなく、他者の認知・認識を弱めていることである。社会的分断は不平等を隠蔽し、同時に社会的一体性を弱体化させうるのである。(高見具広 訳) ■

> Social Inequality in Contemporary Japan

現代日本における社会的不平等

by Sawako Shirahase, University of Tokyo and member of the Local Organizing Committee for the 2014 ISA World Congress in Yokohama, Japan 白波瀬佐和子(日本、東京大学/世界社会学会議横浜大会組織委員会委員)



ハーバードの社会学者であり東アジア問題専門家であるEzra Vogelによる1979年発行のJapan as Number One: Lessons for Americaは日本でベストセラーとなった。

戦後日本において、不平等に関する議論は、必ずしも反駁しない階層間の曖昧な関係と日本の特殊性とが奇妙に併存した形で、ある意味独自のスタイルで展開されてきた。日本はアジアで最初に産業化を達成した国である。1950年代、高度経済成長が始まり、日本の産業構造が大きく変化し、瞬く間に経済大国の仲間入りを成し遂げた。敗戦国から奇跡の国へと変貌を遂げた日本への注目集める一つのきっかけとなったのが、アメリカの社会学者、エズラ・ボーゲルによる『ジャパン・アズ・ナンバーワン』である。そこで日本的雇用慣行が賞賛され、日本人はこれまで味わったことのない優越感をくすぐられた。経済力においては少なくとも、大きく胸をはって世界に日本をアピールすることができる。そこで活発になったのが日本人論である。日本だったから、日本人だから、このような偉業を成し遂げることができたのだ、と。日本人による「日本的なるもの」への確認と心酔は、他国との違いを不要に誇張し、さらには日本の特殊性を絶対視することに加担した。

1970年代終わりから1980年代にかけて、日本は一億総中流社会論に沸くことになる。高度経済成長期より成長率に陰りはみえたものの、平均所得はあがり続け、一般家庭は自動車や電気製品を手に入れる豊かさを手にいれることができるようになった。OECDの報告書でも、日本はもっとも

平等な国の一つであると明記され、日本の特殊性、日本的例外論を後押しした。日本国民の大多数が中流意識をもつ同質的な社会であることが、まことしやかに語られることになる。ところが、中間大衆社会という知見に10年もたたないうちにその信憑性に疑いが芽生え始め、1990年代後半、格差論が活発になっていく。

1990年代はじめ、日本経済はバブル経済が崩壊して長い経済沈滞の時期を迎えた。特に、10代終わりの若者の失業率が上昇しはじめ、1990年6.6%から2002年には12.8%となる。彼/彼女らの多くは高卒者で、高校中退者を含む義務教育のみ修了したものも含まれる。学歴が低いことに加えて、仕事のスキルを会得する機会にも恵まれないで、経済停滞の被害に真っ先になるのが若者たちである。さらには、年功序列、終身雇用制度で代表される日本的慣行そのものも揺らいでくる。1950年代・60年代の高度経済成長の機動力となったのは、学業終了後すぐの新卒採用した若い労働者を企業内部で訓練することを可能にする企業力であり、それは雇用する就労者のみならずその家族の生活保障の提供をも可能にした。年功序列型雇用は、老いも若きも彼らの安定した雇用の上にたった将来を見通せる安心を提供した。しかしながらそれがいま、15~24歳の若者の半数近くが非正規雇用についており、経済的に自立することがままならず、将来の見通しを立てる余裕がない。

若年男性は新しい家族を養う経済力が不十分である故に結婚への準備ができていないと未婚の理由を訴える。その一方若年女性は、結婚・出産によって生活の自由が失われることが、結婚に踏み切れない理由だとする。現代日本において、ジェンダー格差は家族制度の基層にあって社会的不平等と密接に関連している。家族とは日本における社会制度を支える最も根幹的な位置づけにあり、生活保障機能を提供する中心的な役割を担ってきた。頼ることのできる家族がいると、社会経済的困難に遭っても何とか対処できる。しかし、頼れる家族のいない母子家庭や高齢

の単身女性が直面する経済的困難は深刻である。

ジェンダーと世代は日本における階層格差を形成する最も中心的な要因である。社会的、公共的な問題を検討する上に、マクロな視点にたった不平等研究は極めて有効である一方で、その研究蓄積は日本においてそれほど多くない。すべての高度産業社会は社会的不平等の枠組みで議論すべき社会問題を共通に抱えている。しかしその様相や程度は、国によって異なる場合もあれば共通する場合もある。(白波瀬佐和子訳) ■

References

- Sawyer, M. (1976) "Income Distribution in OECD Countries" OECD Employment Outlook.
- Vogel, E. (1979) Japan as Number One. Cambridge: Harvard University Press.

> Haiku:

Beauty in Simplicity

単純さの美学: 日本文化における俳句の位置

by Koichi Hasegawa, Tohoku University, Sendai, and Chair of the Local Organizing Committee of the ISA 2014 World Congress of Sociology in Yokohama, Japan

長谷川 公一(日本、東北大学/世界社会学会議横浜大会組織委員会委員長)



山形県東根市で松尾芭蕉が詠んだ俳句。彼はそのとき平泉へと戻る道中にあった。平泉は、人の栄枯盛衰について彼が有名な俳句を詠んだ場所である。写真:長谷川公一

「俳句」は世界でもっとも短い詩の形式です。そもそもは日本独自のものでしたが、現在では他の文化でも、他の言語でもひろく楽しまれています。伝統的には俳句は5-7-5、合計17音からなります。季語を1つ含まなければなりません。この2つが約束です。俳句の歴史は、精力的な旅人でもあった松尾芭蕉(1644-1694)にさかのぼります。それ以来、俳句は日本の日常生活の一部であり続けています。日本の主要な新聞では、毎日有名な俳句が解説付きで紹介されています。毎週1回、読者からの俳句コンテストが行われ、4・5人の選者が優秀作品40~50句を選んでいきます。週末の市民センターでは俳句愛好家が作品を持ち寄り、批評しあっています。現在俳句愛好家は日本で数百万人にもなります。

俳句は、禅、茶道、日本料理など同様に、単純さを重視します。シンプルであることは、日本文化を代表する価値であり、美学です。日本画では余白を大事にします。色彩や余分な線を抑え、表現しすぎないことを重視します。こうしてもっとも単純化され、直感的な美のコミュニケーションに導くのです。同様に、俳句でも言い過ぎないこと、説明しすぎないことが重要です。微妙なニュアンスを残し、読者に解釈を委ねるのです。俳句の焦点は基本的に1つかせいぜい2つです。つまり俳句は単純さの美学を代表しています。

社会学者のみなさんに、17世紀の俳句の創始者、松尾芭蕉の「夏草や強者どもが夢のあと」というもっとも有名な句を紹介しましょう。日本文学の専門家でコロンビア大学名誉教授のドナルド・キーンは、次のように訳しています。

The summer grasses -----
Of brave soldier's dreams
The aftermath.

芭蕉が1689年に、平泉にある12世紀の有名な戦場の跡を訪れたときの俳句です。毎年廃墟の古戦場に丈高く生い茂る夏草は、循環する自然の永遠の力強さのシンボルでもあります。一方、

>>

ここで戦った侍の夢ははかないものです。芭蕉は、この17音で、循環する自然の永遠の力強さと政治権力の一時的なはかなさを見事に対比しています。俳句では、このように比喩やコントラスト、象徴化などの技巧を駆使しますが、技巧それ自体が目立ってはいけません。あくまでも自然さを醸し出すことが重要です。

自然は長い間日本の生活の中心にありました。日本は四季がはっきり分かれ、四季の移ろいに敏感な感性を育んできました。あなたは、雨に関する言葉やフレーズをどれぐらい知っていますか？ 中型の日本語の辞書には、雨に関する名詞だけでも160語以上も載っています。「小糠雨」、満開の桜の花に降る「花の雨」をはじめ、日本文化は雨や季節の微妙なニュアンスをさまざまに表現してきました。繊細な文化が日本や世界の俳句愛好家を育ててきたのです。私自身も月に10句から20句を詠む俳句愛好家のひとりです。『緑雨(りよくう)』という句集も刊行しています。環境社会学者なので、環境問題や自然災害などからもインスピレーションを得ています。俳句を詠むことは、写真のように、生活や社会、自然の一瞬を切り取ることです。

平泉の中尊寺で芭蕉が詠んだもう一つの句を紹介してこのエッセーを閉じましょう。「五月雨の降り残してや光堂」。

Have the rains of spring
Spared you from their onslaught,
Shining hall of Gold?

芭蕉が詠んだ「夏草や」の古戦場のある平泉一帯は世界遺産です (<http://whc.unesco.org/en/list/1277>)。世界社会学会議の会場、横浜から約3時間です。社会と自然の中での日々の経験を、分析し批評し記録する。俳句と社会学の共通の課題です。(長谷川公一訳) ■

> Executive Committee Meeting in Bilbao

理事会議 スペイン・ビルバオにて

by Michael Burawoy, University of California, Berkeley, and ISA President
マイケル・ブラヴォイ(米国、カリフォルニア大学バークレー校/ISA会長)



Bilbaoで開催されたISA理事会。市内観光も行われた。

ISA理事会(EC)の年次会議が、5日間にわたってスペイン・ビルバオ市のバスク郡大学で開かれた。ホストを務めてくれたのは、ISA理事でもあるベンヤミン・テヘリーナ(Benjamin Tejerina)教授と社会学部の同僚たちである。会議期間のうち二日間は、国際会議である「危機を超えて——新しいリスク、不確定性、プレカリアート」が同時期に開催された。この刺激的な国際会議は、理事会メンバーとプログラム委員会の外部委員を引きつけた。

5日間の「マラソン」はそれぞれの委員会に分かれて始まった。それらは、ラケル・ソーサ・エリザガ(Raquel Sosa Elizaga)副会長が委員長を務めた2014年横浜大会のためのプログラム委員会、ジェニファー・プラット(Jennifer Platt)副会長が委員長を務めた出版委員会、ロバート・ヴァン・クリケン(Robert Van Krieken)副会長が委員長を務めた財務および会員に関する委員会、マーガレット・エイブラハム(Margaret Abraham)副会長が委員長を務めたりサーチ・コーディネーティング委員会、そしてティナ・ウイス(Tina Uys)副会長が委員長を務めたナショナル・アソシエーション・リエゾン委員会(NALC)である。それぞれの委員会による報告は下記のとおりである。

理事会全体として集まったのはその週の最後の二日間だった。台北で行われた「PhDラボ」が成功を収め、プエノスアイレスで開催されたISAフォーラムは活況を呈し、実り多い一年となった。それらは、2014年のISA横浜大会に向けた機運を高めた。私は、その年の様々な大陸への訪問とISAのデジタル・ワールドに関する

進展(Global Dialogue, Universities in Crisis, Public Sociology Live, Journeys through Sociology, 検討中のProfessional Development サイト)について報告した。

理事会は、トロントが2018年大会の開催地となることを承認した。しかし最も急を要した課題の一つは、2016年のISA世界大会をどこで開催するかを決定することだった。我々のもとには、ブダペスト、コペンハーゲン、ウィーンという、3つの素晴らしい都市から申し出があった。そのうちの2都市——ブタペストとウィーン——を候補地とし、両方を視察して最終的に決定することとした。

その他、以下の事項が決定された。

- より多くの理事をプログラム委員会に招き入れるためにISAを再編成するという提案が採択された。この委員会の委員長は会長が務めることにより、プログラムの副会長職を廃止する。この提案は、現在、電子投票のために評議会協議会に差し向けられている。
- 人権侵害に直面している社会学者の擁護を目的としてISAが公式声明を発表する場合の諸条件が確立された。
- 障害者による主な会議への参加について、ISAの方針を発展させた。
- ISAによるプロジェクトのための外部資金を調達する委員会が設立された。
- ISAの新しい賞として、Excellence in Research and Practice賞(Excellence in Research and Practice)が設けられた。

>>

> マーガレット・エイブラハム、研究委員会副会長

ビルバオでのリサーチ・コーディネイティング委員会(RCC)の会議は生産的なものだった。私はブエノスアイレスで行われたThe Second ISA Forum of Sociology(2012年7月31~8月4日)が成功を取めたことについて報告した。このフォーラムでは、650以上のセッションが開かれ、84カ国から3,592名が参加登録した。「社会的正義と民主化の空間」は非常に成功しており、私たちはそれを発展させていくための計画をいくつか立てている。

世界社会学会会則の改定に関する小委員会は、会則を再検討ならびに改訂したりサーチ委員会(RCs)、ワーキング・グループ(WGs)およびテーマ・グループ(TGs)について報告し、来る選挙の前にこのプロセスを終えなくてはならないリサーチ委員会のリストを作成した。RCCは2011年と2012年の助成金の配分に関する報告書を検討し、2013年の助成金の配分について承認した。賞の選出に関する小委員会は、承認されたRC37(芸術の社会学)による賞設立の提案について報告した。テーマ・グループ05(視覚の社会学)によるワーキング・グループへの昇格に関する申請が承認された。社会学とソーシャル・ワークに関する新しいテーマ・グループの設立という提案は、詳細に検討されたものの、既存のRCと重複するために最終的には否決された。

RCCは2014年に開催される世界社会学会横浜大会の準備状況について話し合った。そこでは以下のことが議論された:

- Second ISA Forumの際に、ならびにRCプログラム・コーディネイターから寄せられたフィードバックに基づいた、Confexによるオンライン・システムの向上の進捗状況。
- RCCとNALCによって、世界大会における10のIntegrative proposalの採択。
- RC、TG、WG参加者に登録費の援助という形式で助成金を提供することによる助成金の使用の改善。
- 新しく選出されたRC/WG/TG役員の研修とリサーチ・カウンスル会議のためのアジェンダ。

なお、ISA財務委員会が、私たちの要求に応じて、横浜大会のプログラム・コーディネイターらの登録費を支援するための追加予算(10,000ユーロ)を承認したことをここに報告する。

> ラケル・ソーサ・エリザガ、プログラム副会長

過去3年間、プログラム委員会は、委員のほとんどがメンバーでもある理事会の年次会議開催に合わせて、会合を開いてきた。メンバーはマイケル・ブラヴォイ(ISA会長)、マーガレット・エイブラハム(リサーチ部門副会長)、ティナ・ウイス(National Association副会長)、エレナ・ズドゥラヴォミスロヴァ(Elza Zdravomyslova)、ベンヤミン・テヘリーナ、サリ・ハナフィ(Sari Hanafi)、チン・チュン・イ(Chin Chun Yi)、そしてプログラム部門の副会長を務める私から構成されている。また、Local Organizing 委員会の委員長として長谷川公一教授が出席した。さらに、不平等研究を専門とする優れた研究者たちのグループも、我々からの招きに応じて委員会の外部メンバーとして参加してくれた。彼らは、エドガルド・ランダー(Edgardo Lander)、ゴラン・サーボーン(Göran Therborn)、カルパナ・カンナビラン(Kalpana Kannabiran)、マーカス・シュルツ(Markus Schulz)、J.エステバン・カストロ(J. Esteban Castro)、そしてボアヴェンチュラ・デ・ソーザ・サントス(Boaventura de

Souza Santos)(残念ながら会議に出席することができなかった)である。委員会のメンバー全員が持つ学識と経験は、質の高い科学的な議論を約束してくれた。感謝すべきことに、彼らのコラボレーションによって、Facing Inequalityの原稿を準備することができた。それは学会のウェブサイト上で公開されており、plenaryにおいて議論されるべきすべての問題へいかにアプローチすべきかに関する話し合いの土台となった。また、彼らはプログラムの構造と編成、各plenaryの数と特徴を決定する際にも力を尽くしてくれた。それらの決定事項は、今、世界中でその貢献が高く評価されている同僚へと伝えられている。この作業の結果は、学会が今後公開する号で発表していくつもりである。

また委員会は、各plenaryが世界大会の編成と構造全般にどのように貢献すべきかについても詳細に議論した。私たちが掲げるテーマによって、多大な関心が巻き起こったことによって、著名な専門家たちによる「Authors Meet Critics」部会、Local Organizing委員会による特別部会と会長部会を組み入れ、Integrative, National AssociationsとAd Hocセッションにおける研究者の貢献の新しい地平を切り開くことが可能となった。それらを10のplenaryに統合することが初めて承認された。横浜大会は、ユネスコが言うところの「ミレニアム・デベロップメント・ゴール」が完了する一年前に開催される。私たちの努力が、可能な限り、不平等に関する深い理解とそれを克服する方法に貢献することを期待している。

> ジェニファー・プラット、出版部門委員会副会長

私たちの出版事業は順調に進んでいるが、状況の変化に応じていくつかの新しい展開がある。

Sociopediaとの協力で制作されたCurrent Sociologyの最初のレビュー号が今年発行される予定である。この号には、様々な分野の著作——たとえば、社会的紛争、災害研究、健康、病——に関する最新のレビューが掲載されることになっている。これは今のところSociopedia上でのみ公開されているが、より広範な読者に向けて公開されることになる。後の号では、より様々な分野のレビュー論文の直接投稿を受け付ける。The International Sociology Review of Booksもまた、作品のレビューを受け付けている。レビューの対象は、厳密に「本」のみとはせず、たとえば映画のレビューも含んでいる。The eSymposiumは移転中であり、The eSymposiumは「社会的正義と民主化」ウェブサイト<http://sjspace.sagepub.com/>上に掲載される予定となっている。ただし各号は、その次の号が発表されるまで、ISAメンバーのみアクセス可能である。現編集者であるヴィネータ・シンハ(Vineeta Sinha)が当ウェブサイトのディレクターとなり、ケルヴィン・ロウ(Kelvin Low)が彼女の後を引き継いで編集者を務める。

国際的な社会学コミュニティからの高まる要請に対応できるように、オンライン調査をととして、Current Sociology と International Sociologyの内容についての意見を募集している。その結果は世界大会で議論される予定である。

私たちの出版物であるSage Studies in International Sociologyでは、大幅な価格改定が行われている。図書館に収めるためにハードバック版は依然として刊行されているが、低価格のペーパーバック版がISAメンバーと開発途上の市場で購入可能となるだろう。現在、シリーズのなかの第一号として、Key Texts in World Sociologyが準備中である。

>>

なんらかの助成団体によって支援を受けた研究に関する雑誌記事への「オープン・アクセス」を求める切迫した要求を受けて、新しい規定の導入が必要となっている。現在合意されていることは、オープン・アクセスを必要とする著作の著者は手数料を払えば論文をただちに一般に公開することができるということと、一年のみが経過すれば公開される「グリーン」なオプションが妥当だとする人びとは手数料を払わずにオープン・アクセスを得ることができるということである。

>ティナ・ウィス、National Association Liaison 委員会副会長

National Association Liaison委員会(NALC)にとって、2012年は生産的だった。NALCのカレンダー上で、来るべき最も重要なイベントはNational Association協議会の会議である。これは2013年5月13～16日に、トルコのアンカラにある中東工科大学(the Middle East Technical University, METU)のキャンパスで開催される。この会議のテーマは「混乱の時代の社会学——比較アプローチを用いて(Sociology in Times of Turmoil: Comparative Approaches)」である。この会議には、約70名が参加を予定しており、そのうち40名がISAの団体メンバーであるnational associationからの代表者である。トルコのLocal Organizing委員会と、その議長でありMETU社会学部長でもあるDr.アイス・サクタンバーAyse Saktanber教授による、会議を確実に成功させようとする多大な労力に感謝の意を表したい。

サウジ社会学とソーシャル・ワーク学会による一般団体メンバーとしての加入申し込みは、彼らの学会会則に関する議論を経て承認された。現在、57の一般団体メンバーがISAに加入している。私たちはまた、申請中の団体が次回のNALC理事の年次会議までに申請結果を待つ必要がなくなるように、各年の理事会が開催されるまでに受け付けた一般団体メンバーによる加入申し込みの処理プロセスを再考した。

キルギスタン社会学会、イベリア社会学会議、ブルガリア社会学会、モザンビーク社会学会、ISAからの助成金を得てそれぞれの団体が主催した各地域での会議について報告書を提出した。これらは話し合いを経て承認された。

ウェブサイト更新のための助成金がアルゼンチンConsejo de Profesionales en Sociología、アルゼンチン、オーストラリア、クロアチア、ドイツ、イランそれぞれの社会学会に授与された。フィンランド・ウェステルマルク学会は、当該地域においてノルディック諸国からの大学院生の参加によるPhDワークショップを組織するための助成金を受け取った。NALCメンバーは、助成金申請の際にはワークショップが持つ地域的特性を明示することの重要性を強調した。

>ロバート・ヴァン・クリケン 財務と会員部門副会長

・会員

当委員会が個人会員と団体会員を検討したところ、その数は2012年12月時点で史上最高の5300だった。

各リサーチ委員会、ワーキング・グループ、テーマ・グループについても検討した結果、会員数の減少という点で4つのRCが中から高程度の危機的状況にあることがわかった。その一方で会員数が著しく増加しているのは、RC07 発展研究、RC09 社会的変容と発

展の社会学、RC13 余暇の社会学、RC19 貧困と社会保障、社会政策の社会学、RC21 地域と都市開発、RC31 移動の社会学、RC32 社会のなかの女性、TG03 人権とグローバル・ジャスティス、TG04 リスクと不確定性の社会学、およびTG05 視覚の社会学である。

また、終身会員が閉める割合の増加についての懸念が示された。当委員会はこの問題に関する討議を理事会に委託した。イシュワール・モディ(Ishwar Modi)とトム・ドウワイヤー(Tom Dwyer)から構成する小委員会は、会員数に関する諸統計の分析結果を報告し、会員資格の改善に関する多くの勧告を行った。そのなかには、会員数の推移を注意深く検討していくための小委員会の設立も含まれた。

・財務

当委員会は、会費、出版物からの印税、利息収入における微減と、ISAの運営に関する様々な側面での支出の増加を確認している。しかしSageからの出資は著しく増加している。

詳細な2011～2012年の財務報告はISAのウェブサイト上で公開される予定である。

いくつかの追加予算要求が検討され、承認または最終決定を理事会に委託された。そのなかには、世界大会予算の一部として、横浜大会に出席するNational Association代表者と横浜大会のプログラム・コーディネーターらへの助成金に対する追加支援のための条項が含まれている。(土田久美子訳) ■

> Introducing the Polish Editors

The Public Sociology Lab

紹介: ポーランド編集委員・公共社会学研究室

by Karolina Mikołajewska, University of Warsaw and Kozminski University, Poland
Karolina Mikołajewska (ポーランド、ワルシャワ大学およびコズミンスキー大学)

2011年の秋、私たちはワルシャワ大学の社会学部に公共社会学研究室 (Koło Naukowe Socjologii Publicznej) という学生組織を立ち上げました。学部生と大学院生、聴講生からなる私たちは、C. Wright Millsの有名なフレーズ「私的問題における公的問題 (public issues in private troubles)」の発見を共通の関心としてこの組織に参加しています。私たちの社会生活にひそむ社会的な問いの追及が目的です。

私たちの活動は多岐に亘りますが、主たる活動目的はGlobal Dialogue (以下、GD) をポーランド語に翻訳することにあります。GDの2-4には、SztompkaとBurawoyによる論争から浮かび上がる問題に関して、特にポーランドにおける学究生活の条件に言及しつつ、議論のまとめを掲載しました。この議論は、これまでにたくさんオーディエンスを魅了してきた公共社会学の分析手法に関して、異なる手法に言及した私たちの議論の一つです。それとは別に、私たちは精力的に活動している社会学者と一連のセミナーを開いています。現在、ポーランドにいる社会学専攻の学生間でのネットワーク構築を計画しています。GDのネットワークに参加できること、そして私たちの公共社会学に関する議論がポーランドを超えて広く伝わるのが何よりもうれしく思っています。

E-mailでの連絡はこちらまで: public.sociology.kn@uw.edu.pl
(前田豊記) ■



Adam Müller: 博士候補生 (ワルシャワ大学社会学部)。社会学修士 (ワルシャワ大学)。現在の彼の研究関心は、協同組織金融機関の制度と道徳経済です。



Karolina Mikołajewska: 博士候補生 (ワルシャワ大学社会学部)。社会学修士 (ワルシャワ大学)。現在、TA・RAとしてワルシャワにあるコズミンスキー大学Center for Research on Organizations and Workspacesに勤務。研究関心は、経済人類学・社会学、組織研究。



Krzysztof Gubański: 学部生 (社会学、カルチュラル・スタディーズ、ワルシャワ大学)。ルートヴィヒ・マクシミリアン大学 (ミュンヘン) に一年間留学。関心は、経済社会学、都市研究、言説分析。学生自治委員の活動メンバーとして所属し、ポーランドにおける高等教育の変遷に関する学位論文を執筆中。



Mikołaj Mierzejewski: 学部生 (社会学、ワルシャワ大学)。関心領域は、高等教育の社会学、科学の社会学、経済社会学、階級分析、公共社会学など。学究的環境における最近の変化をテーマとする組織「New Opening of the University」の先導的メンバーで、研究組織メンバーでもある。

>>



Jakub Rozenbaum :学部生(社会学、ワルシャワ大学)。現在、ワルシャワにおける共産主義以降の私財賠償に関する学位論文を執筆中。おもな社会学的関心は、労働関係、市民(特に若年層の)参加、住宅問題、社会変動における社会科学の貢献に強く賛同している。



Anna Piekutowska :大学院生(社会学、ワルシャワ大学)。関心は、社会運動、社会経済、ジェンダーの社会学、セクシリティ。以前の研究では、フェミニスト組織の分析と、その組織がポーランドにおける女性の環境に与えた影響を分析した。修士論文のために、社会的包摂を分析枠組みとした社会的協同組合を検討中。



Tomasz Piątek :博士候補生(ワルシャワ大学Robert B. Zajonc Institute for Social Studies)。おもな関心領域は、教育社会学、教育システム、若年層研究、批判教育学、社会学者の社会的責任に関する問題。



Julia Legat :修士課程(ワルシャワ大学社会学部)。学士(社会学、ワルシャワ大学)。おもな関心領域は、社会運動、市民参加、社会的不平等。



Zofia Włodarczyk :学部生(社会学、ワルシャワ大学)。田舎に住む女性のバイオグラフィを用いて、主体による様々な言明を対象にした学位論文を執筆中。主な関心領域は、公共社会学、市民参加(とくに若年層と田舎における)、バイオグラフィの社会学。



Emilia Hudzińska :大学院生(国際関係、ワルシャワ大学)。現在の関心は、アメリカ研究と脱植民化の問題。ワルシャワ大学大学院の社会学部を修了しており、社会学修士号を持つ。修士論文では、ポーランドの著名人と政治家の権力関係を検討した。

> Canadian Sociology is ready to welcome you!

カナダ社会学はあなたをお待ちしております

by Patrizia Albanese, President-elect, Canadian Sociological Association; Chair, Local Organizing Committee of the 2018 ISA World Congress; and Ryerson University, Toronto, Canada

Patrizia Albanese (カナダ社会学会選出会長/2018年ISA国際会議設立委員委員長/カナダ・トロント、ライオン大学)



マイケル・ブラウホイイやイザベラ・バルリンシュカと、2018年の世界社会学者会議について討論するために集まったトロント地域の社会学者たち。後列左から右へ: Lorne Tepperman (University of Toronto)、Cheryl Teelucksingh (Ryerson University)、Izabela Barlinska (ISA Executive Secretary)、Bob Andersen (University of Toronto)。前列左から右へ: Nancy Mandell (York University)、Patrizia Albanese (Ryerson University)、Lesley Wood (York University)。

2018年ISA世界社会学者会議の開催地にカナダのトロントが選出されました。このニュースをみなさまと共有できることをカナダ社会学者はうれしく思っています。2018年の国際会議にむけて、みなさまとより知り合える多くの機会を持てればと考えています。私たちはちょっと変わっていますが、フレンドリーな集団で、批判的かつ自己再帰的な集団です。私たちの活動を含めて簡単な自己紹介をさせていただきたいと思います。

カナダ社会学。自己紹介は何でないかということから行った方がわかりやすいと思います。手始めに言えば、私たちは退屈な集団ではなく、活気がないわけでもなく、同類で固まっているわけでもなく、少ない言葉で語るのも簡単ではありません。

社会学は(ほとんど)常に、伝統的なディシプリンや学問の内外からアイデアを取り入れることに対して寛容です。私たちは、いわゆる「規範」から外れた場所・空間やアイデアに手を伸ばすことを恐れない貪欲さに長けた集団です。注目し、刺激を与えて、

われわれ自身や生活のためにしていることにさえ疑問を投げかけます。他の社会学者のように、われわれは誰なのか、われわれは何をしているのか、どうしてそれをするのかを数年来カナダ社会学者は考えています。Robert Brym (2003)、Neil McLaughlin (2005)、and Doug Baer (2005)などがカナダ社会学は危機に瀕しているのかについて議論していますが、こうした議論や論争が存在すること自体が、カナダ社会学の健全性の証左であると私たちは考えています。また、冷静になってみると、Mark Twainの言葉にあるように「自己の死に関する報告は極めて誇大になる」と言えましょう。

カナダ社会学は活発に活動しています。実際、Canadian Journal of Sociology の評判に表れているとおり、カナダ社会学会は成長しております。最も伝統のある査読誌Canadian Review of Sociology (CRS) の編集委員を現在勤めているReza Nakhaie博士(ウインザー大学)は、過去45年にわたる雑誌の歴史を概括した論文を最近執筆しました。その論文中で彼は、「CRSに所収されている論文は、カナダのメインストリームに位置して、学術的で、ときに批判的で、さらにラディカルで対立的でもある科学社会学を体現する知識人と社会学者の活発な会話に貢献している。このように、カナダの専門家集団と批判的学問領域の対話やアイデアの普及のための道筋としてCSRは存在している」と述べています(Nakhaie, 2010: 320)。

われわれの学問にとってつねに真であり続けることが、当面の問題に意味をもち続けるわれわれの能力であると考えています。当面の問題と乖離した社会学は危機に瀕していると言わざるを得ません。英語を主言語とするカナダの54の社会学部を対象にして、授業プログラムの内容を分析した結果、学部生向けプログラムで特に強調されているのは、批判的思考の実践、広範なりベラル・アーツ教育の重要性、取り巻く社会的環境へ持続的なインパクトを与えられる機会であることが分かりました(Puddephatt and Nelsen, 2010: 423)。もし、われわれが学部生に対して(大学院生に対しても)、これらを部分的にでも提供できたのであれば、学問としての意義を証明できていると考えています。

この簡単な自己紹介の締めくくりに、私たちカナダ社会学者の展望をみなさまと共有しておきたいと思います。この論文の執筆にあたり、何がカナダ社会学の特色なのかについて、カナダ全域を対象にしてE-mailで尋ねてみたところ、以下のような回答をカナダ社会学者から得ました。

>>

- 「カナダ社会学の特色は、言語、地域、教育的トレーニング、理論的アプローチ、経験的应用などの複数の軸において見出すことができる。もし、国中の社会学者の間にコンセンサスが存在するとしたら、アメリカ的、ヨーロッパの伝統を統合する態度、歴史的な趨勢に注目する点、質的・量的方法の併用に寛容である点、「批判的」な営みへのコミットメントあたりであろう。カナダ社会学の立ち位置は、当初ポーター的な自由主義の伝統にあったが、その後、新マルクス政治経済主義にとってかわり、より最近では、脱植民地主義やフェミニスト、ポストモダンなどに移行した。カナダ社会学に欠けているのは神聖視された絶対的な視点で、これはカナダ社会学の健全性を表す兆候である。」(Howard Ramos准教授(博士)。社会・人類学部。ダルハウジー大学)

- サスカチュワン大学では、学部生むけの理論セミナーでこの問題を議論し、次のような結論で合意しました。すなわち「自然・地理的環境の変化に伴うカナダの多様性に富む人口構成は、複雑な社会関係の理解に挑む機会を与えてくれる。著しく多様性に富む人間社会の機微を理解できるという点がカナダ社会学を高めている。ナショナルイメージや、共有の価値観や文化的特性の概念でうわべだけ飾った構造の舞台裏を暴露するのに重要な鋭い刃をカナダ社会学は備えている。」

- カナダで最大の社会学部の一つであるヨーク大学社会学の学部長Nancy Mandell博士は、自分自身のプログラムについて次のようにまとめています。「われわれが受け継いだニッチとは、1960年代の批判社会学から勃興し、その応用が国際的になされている参与の社会学を学生に伝えることである。慣習的な前提に挑み、その結果として、健康格差の是正、性差別の撤廃、正義を司る公的主体の説明責任といった問題に関する社会的正義の徹底を目的とする学問、これに対する批判的アプローチを学部では採用している。広く言えば、不平等、権力関係、イデオロギーの問題に焦点をあてて、社会活動を促す学問とも言える。われわれの現代社会の理解を目的とした分析において、多くの学部スタッフは、歴史の中心性を強調したアプローチ、とくに世界中で見られる植民地と帝国主義の拡張主義による影響を重視したアプローチを用いている。」

- Paula Graham(博士候補生、ニューファンドランドメモリアル大学)は「社会運動を対象とした私の調査から見れば、「カナダ社会学」という概念は概して開放的なものだ。「カナダ社会学」のカナダらしさを定義しようとする努力自体には共感す

るし、プログラムとして学問分野を固めるという努力にも共感する。しかし私は、「カナダ社会学」をあいまいな定義にしておいた方が便利だと思う。アメリカ社会学やヨーロッパ社会学、その他諸々の解釈図式などに凝り固まるのではなく、カナダを含む社会学全般の関心に依拠した文献や理論に、より柔軟に寛容的に取り組むことができる」と述べています

未筆ながら、セミナールーム、パブ、レストランでみなさまと活発にアイデアの交換ができると期待して、カナダ社会学者はみなさま個人々々を迎えられることを楽しみにしています。そして、新しいエキサイティングな協力関係を作り上げられると確信しています。(前田豊訳)■

References

- Baer, D. (2005) "On the Crisis in Canadian Sociology: Comment on McLaughlin." *Canadian Journal of Sociology* 30(4): 491-502.
- Brym, R. (2003) "The Decline of the Canadian Sociology and Anthropology Association." *Canadian Journal of Sociology* 28: 411-416.
- McLaughlin, N. (2005) "Canada's Impossible Science: Historical and Institutional Origins of the Coming-Crisis of Anglo-Canadian Sociology." *Canadian Journal of Sociology* 30(1): 1-40.
- Nakhaie, R. 2010. "Les 45 années de la Revue canadienne de sociologie (et d'anthropologie). 45 years of the Canadian Review of Sociology (and Anthropology)." *Canadian Review of Sociology* 47(3): 319-325.
- Puddephatt, A. and R.W. Nelsen (2010) "The Promise of a Sociology Degree in Canadian Higher Education." *Canadian Review of Sociology* 47(2): 405-430.

¹ Translation: "The articles published in the CRS have been instrumental in producing dynamic dialogue among sociologists and other intellectuals who represent Canada's mainstream and scientific sociology which is academic and at times critical, radical and oppositional. As such, the CRS represents and has been an outlet for the dissemination of ideas and dialogue among Canadian professionals and critical academics."

> Letters to the editor

編集者への二つの手紙

Responses to Feras Hammami on Israeli Universities (Global Dialogue 3.2)

イスラエルの大学にかんする記事(Global Dialogue 3.2)の著者、Feras Hammamiへの応答

親愛なる編集者殿

Feras Hammamiの「イスラエルの大学における政治的危機」(GD3.2)という記事を、同じ号に掲載された他の記事と対照させることは有益であろう。André Béteilleはひとりの社会学者として道徳を説くことが彼の役割ではないと述べている。一方Jacklyn Cockは、苦難を被った人びとの被害者の地位に栄光を与えることなく、かといって責任ある人びとを悪役に仕立てあげることせずに目的が達成されるような、そのようなきわめて政治的な手法で記述している。それは問われるべき諸々の責任が存在しないからではなく、彼女が弁護人あるいは裁判官になることを主張しないためである。だがイスラエルについての記事は、これらの記事と対照的に、まず道徳を説き糾弾することから始め、運動家らのソースのみを根拠として用いて、人目を引く難しい数々の事例に焦点をあてている。著者は自分自身の主張を補強するために、ほかの学術的なソースあるいは新聞記事などを見つけてきたであろう(それこそが結局のところ学術的な出版というものであろう)。もしかすると彼は期限内に追われていたのかもしれない。なぜならHammamiの問題としたベングリオン大学の政治行政学部閉鎖の決定は、イスラエル高等教育審議会によって2月13日に覆されたからである。事実としてイスラエルの右翼団体は、彼らの考え方に基づいて教授を告発し、またNeve Gordon教授の場合のように、その圧力は時おり極端ですらある。しかし「公的な中傷、失職、投獄、あるいは死すら避けるために、学術機関のスタッフは当局の怒りに触れるような情報の発信に制限を設けている」というきわめて深刻で広範にわたるこの記事の主張を行うためには、複数の証拠を提供しなければならない。これは十分な配慮なしに投げかけられる主張ではない。いずれにせよ、現在もNeve Gordonは大学においてテニュアの教授職に在任している。またAriella Azoulayの終身在職権の解除については、実際多くの批判が寄せられ、政治的に動機づけられたその見方は広く共有された。これらの状況を踏まえたとしても、一つの大学を政治的バイアスによって告発するという深刻な問題については、いくらかの根拠が示されなければならなかったし、示すことは可能であっただろう。

この記事は、個人の人格を踏みにじめるようなボイコットを呼びかけ、政府の悪事のためにその国に住む人々を罰しようとしている。ボイコットを呼びかけること。それはもちろんの外れではない。それは人々の意識に働きかけ、このケースにおいては、イスラエルの学者たちに彼らの政府の行為に対しての反省を促すことができる。ただし(想定される)仲間すべてを孤立させ中傷するようなキャンペーンを正当化することはできない。キャンペーンを実施するものたちは、政府を現実的に痛めつけることができるような領域により焦点を当ててであろう。実際私は、たとえばEUのイスラエルとの友好的な貿易関係を取り除くことに反対しない。それは既に、West Bankの製品に「イスラエル製」というレッテルを貼るといふ混乱を引き起こしている。

この記事における南アフリカとのアナロジーもまた問題を含んでいる。なぜなら南アフリカの大学とスポーツ協会は政策として差別を実行しており、それはイスラエルにおいては見られないからである。このボイコットは、しかしながらある種の狭量な提案といわざるを得ない。それは職業的および知的な関係を台無しにし、イスラエル科学者を含む学術的なコラボレーションを政治化しさえするのである。

David Lehmann、ケンブリッジ大学、UK

敬愛する編集者殿

Feras Hammamiの描きだしたイスラエルの大学における政治的危機は、イスラエルの研究者が政府の政策に対する抗議の必要性をほんの少ししか感じることがなかったということを強調している。大多数の研究者はパレスチナの大学が閉鎖されたときに沈黙を守ったが、彼ら自身の学問の自由が脅威にさらされたときには、これまでとは著しく異なる反応がみられた。危機とはしばしばチャンスを提供するのである。

イスラエル国家にとってのひとつの強力なプロパガンダの武器は、自らをアラブの専制政治体制のただなかにある民主主義の孤島として映し出してきたことであり、またもう一つには自らの大学をリベラル側の批判者の源として投影してきたことにあった。アラブの春を時期尚早に主張したメディアの浮かれ気分の余波が過ぎ去るなかで、イスラエルの主張する民主主義と、リベラルな批判者の源としての大学というプロパガンダは困難に直面している。一握りの研究者たちは、政府に対するごく少数の反対者によって支援されたが、より大きな国際的支援によって、(止めることはできなかったとはいえ)損害を限定することはできた。国際パネルは、学部全体の閉鎖が提案されたベングリオン大学において、イスラエルの学問の自由に対するコミットメントへの消極性を明らかにすることに批判的立場をとるといふ役割を果たした。イスラエルの大学システムのなかにあるすべての政治学部を評価するために国際パネルを招いた高等教育審議会(CHE)は、閉鎖の推奨を報告書のなかに読み取った。CHEが大学内外においてハイパー・シオニストからの圧力を受けていたことは疑いを差し挟む余地はない。シオニストたちは既にその学部をアンチ・シオニストたちの巣として目をつけており、またその主要な標的として学術的ボイコットの支持者としてよく知られているNeve Gordon教授に照準を定めていた。

CHEはその圧力に屈するかたちで2012年9月に閉鎖を提案した。だがイスラエルの科学とテクノロジーの原動力であるワイツマン科学研究所とは異なる他の上位の大学人たちは、すぐさま、このことが学問の自由の最後のよりどころというイスラエルの大学のイメージに悪影響を与えることを予見した。その週のうちに、300人ものイスラエルの研究者が、決定を批判する請願書にサインした。国際的には、個別の研究者と学会からの抗議が巻き起こった。イスラエルの最も重要な大学の一つであり、その一学部が脅威にさらされたベングリオン大学もまた、この問題の孕む危険性を鑑みて、CHEに対して法的な申し立てを行った。その決定の背後には秘密にされていることがあり、学術的にみて無関係なアジェンダが学問の自由という法的な規定に違反すると主張した。さらにCHEにとって不利であったことには、国際パネルが学部閉鎖を推奨していないと述べたうえで、この動きの背後にある諸々の動機を問題視しており、バルレイン大学の動きに対してCHEが動かなかったことを指摘したことであった。ただし、その学部もまた批判された。

CHEへの高まる圧力は、閉鎖を1月の選挙まで延期させた。そこでは極右政党が選ばれたが、閉鎖の決定は覆されることはなかった。だが2月の初めに、イスラエルの報道機関のなかで最もリベラルなHaaretzは、閉鎖の決定が取り消されたこと、また国際委員会が引き続きその学部を監視の対象とすることを報じた。希望は、いまやイスラエルの学界が自らの学問の自由への脅威を経験し、国際的な支援を受けた抗議が成功裏に終わり、そして学問の自由とは立場によって分けられずに数マイル先で教え研究しているパレスチナの実験者たちにも適用されることを認識し始めるだろうという点にあるに違いない。これこそがまさにチャンスである。

Hilary Rose、ブラッドフォード大学、UK
(福田雄訳)